

504
20

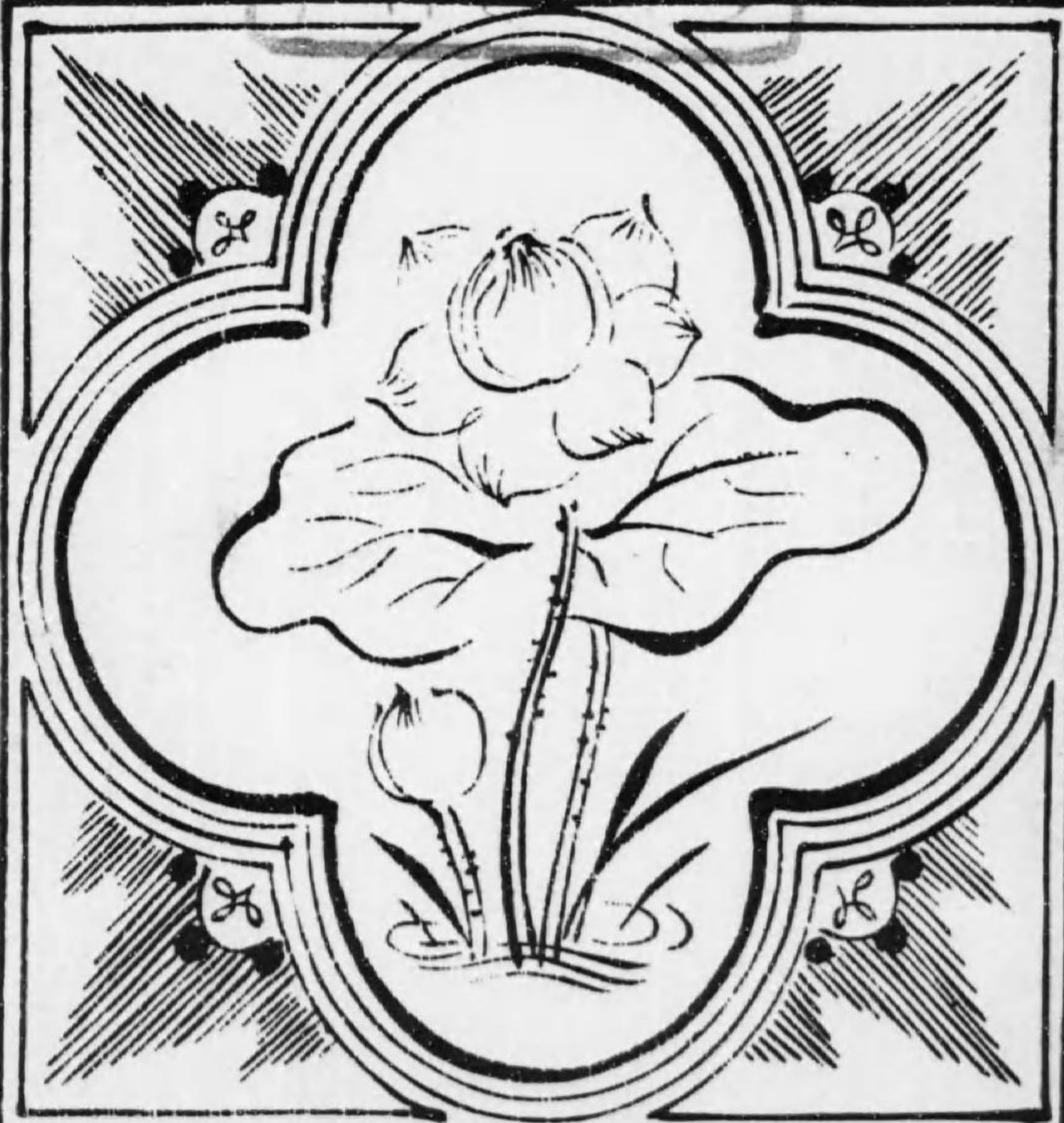
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始



504-20

聖者の生活
荒野之光



倉田百三
中村亮平
著

洛陽堂

大正

11. 4. 5

内交

或る教師の夢

——序に代へて—— 倉田百三

第一場

小學校の宿直室。正面に窓。窓には白い天竺木綿のカーテンがかけてある。カーテンは月の光をあびてゐる。右手に粗末な木のベットあり。側の壁にグレコのフランシスの繪がピンで押してある。中央に粗末なテーブルに向ひ、蠟燭の光で中年の教師一心に原稿を書いてゐる。

(間) 蟲の聲がしきりにする。

教師。(ペンををき、がっかりしたやうに溜息をつき)あゝ駄目だ。何んと云ふ權威のな
い筆つきだう。自分ながらいやになる。(間)(窓の方を見る)あゝ何時の間にか月が上

つたのだな。カーテンが青く映へてゐる。外は寒いほど美しい月夜なんだらう。(凝つと耳をかたむけて蟲の聲を聞く。悲しそうな顔になる。) 淋しい夜だ。思へばわしは平凡な人間だ。少いさなく、蟲けらのやうな者だ。わしなどが聖人たちの傳記を書かうと云ふ企てを起すなんて初めからだいそれてる。うまく書けないのは當然だ。(がっかりしたやうに立ち上る。) あ、疲れた。いつそ止してしまはうかしら。(部屋をあちこち歩く) だがやつぱり書きたいな。もう一月の間毎晩、夜更けまで書いたんだから。何度も眠られない夜をすごしたんだから。(再び机のそばに行き原稿を取り上げ、読み入る。やがて) やつぱり駄目だ。わしはどうしてこんなに無力なんだらう。(投げるやうに原稿を机の上に置く。) やつぱり止めた方がい、かしら。聖人の生涯を讀したら。(失望したやうに窓の側に行き、カーテンをあける。月の光がさしこむ。窓のそばに寄り、外を眺める。校庭の櫻の並木が見える。その向ふに小川をへだて、松林のある小さいな丘が見える。月は櫻の梢にか、つてゐる。) 淋しい清い景色だな。あ、いつの間にか随分夜が更けたのだな。

だな。

(遠くで犬の吠える聲が聞える。)

(老いたる小使提灯を待ちて登場。)

小使。先生まだお休みでは△いませんか。

教師。(ふり向いて) 少し書き物をしてゐた。夜廻りですか。

小使。はい、よく御精が出ますな。あまり勉強がすぎるとお體に障りますよ。もうお休みなさいませ。

教師。有難う。もう少し考へたい事があるから。

小使。(教師の顔をじつと見て。) お體を大事になさいませ。子供たちが皆親の様に慕つてゐるので△いますから。

教師。爺やも早く夜廻りをすませてお休み。

小使。はい。有難う△います。では一寸廻つて來ませう。(退場)。

(やがて林の音が聞える。)

教師。(外を眺め。)あ、しんとしてゐるな。晝間には何百と云ふ子供があんなに騒ぎまはつて遊んでゐたのに。(涙ぐみ。)あ、野に行き、山に行き、子供達と遊ぶのはどんなに幸福だらう。わしは彼等の爲に喜んで此草深い田舎に埋れてやる。少いさいくお前達にわしの一生を捧げてやるぞ。(間) (月のかゝた櫻の木を眺め、急に悲しそうな表情になる。)あ、太郎よ。お前は今何處に居るだらう。此夏にはあの木の上つて、櫻ん坊を取つて食つてゐたのに。お前が頼べたまで紫色にしてゐる顔をわしはどんなに見たいだらう。あ、神様、何卒太郎の小さいな魂を守つてやつて下さい。あ、神様。あの去年の夏、川に溺れて死んだお花の爲にも、神様許して下さい。私の注意が足りなかつた爲に、お預りしてゐた可愛い子供を二人迄殺してしまひました。(間) (暫らく泣きながら祈つてゐる。やがて決心したやうに顔を上げ。)やつぱりわしは書いてをきたい。神様と其の使徒、また聖人達の事を子供に讀ませて知らせてをきたい。それは子供達の心にき

つとよい種を蒔くのだから。(窓のそばを離れ、机のそばに行き、腰を掛ける。)併しもしわしが小さい子供達をつまづかせたらどうだらう。わしのやうな愚かな人間が。あ、考へても恐ろしい事だ。(間) わしはどうしたらいいのだらう。そうだ。やつぱり神様に祈つて尋ねてみるほかはない。(椅子より下り、ひざまづき両手に頭をのせ祈る。)

(長き間。)

(風窓より吹きこみ、蠟燭の灯消ゆ。)

ダーク、チエーンジ

第二場

丘の上。後景に松林。舞臺一面に秋草。

蟲が鳴いてゐる。正面中央に見上るやうな大きな菩提樹が一本立つてゐる。其の下に聖人達の像が建て、ある、舞臺は青白い月の光で夢の様に照らされてゐる。單調なス

クルル、ベルの音が絶えず。長い間ををいてゆるやかに聞こへる。それが舞臺全體に夢幻的な感じを與へてゐる。舞臺空虛。やがてオルガンの音聞え。十数名の男女の子供達手をつないで登場。聖人達の像の前まで來り。像に向つて手を合せて拜み、やがて圓い輪の形を作る。

子供達。(聲をそろへて歌ふ。)

ひらいたく

なんのはながひらいた

蓮のはながひらいた

ひらいたとおもつたら

またすぐしぼんだ。

(一同中心に向つて集まる。)

子供達。(また聲をそろへて歌ふ。)

しぼんだく

なんのはながしぼんだ

蓮のはながしぼんだ

しぼんだとおもつたら

またすぐひらいた。

(子供達ふたゝび圓く輪を作る。其の通りを何度も續けながら、舞臺を横切つて反對の方角に退場。)

(オルガンの音やむ。)

(間)

教師。(原稿を胸の處にかゝへて、何か考へ乍ら登場。ふらくと歩いては、立ちとゞまつて考へ、またふらくと歩く。)あ、考へ乍ら歩いてゐるうちに、何時の間にか此處に來てしまつた。(舞臺を見廻し)こゝは聖地だ。聖人達の靜かに眠つてゐられる處だ。(襟

を掻き合せるやうにする。罪のない子供達のほか滅多に来てはならない處だ。わしなどがこんな汚れた心で。(沈黙。)だが許して下さいさう。わしが悶へてゐるのは子供達の爲なんだから。そうだ、わしは尊い方々におすがり申そう。御心をお尋ねして見やう。其のほかにはわしの心を決める道はない。(靜かに聖人達の像の前に行く。ひざまづき、手を合せて拜む。やがてつゝ、しみ深い聲で。)尊き聖人様方、夜更に醜き者が靜かなお眠りを亂しました事をお許し下さい。私は少さいさな僕。子供達を世話する事を務めとしてゐます愚な教師でゐます。私はあなた様方が此の世に生きてゐらつしやいました間の尊い御生涯について、少しでも子供達に知らせたいと思ひまして、此のやうに一つの草稿を書き綴つたのでゐます。(原稿を石段の上に捧げる。私の出過ぎた企てを何卒許して下さいませ。私は併し、私の愚かな書き方であなた様方の御生涯を瀆しはしないかと恐ろしゆうみます。また幼ない子供達をつまづかしはしないかと心配でたまりません。その爲に一層の事この原稿を焼いてしまはうかと思ふ事さへゐますが、一方子

子供達にほんの少しでもあなた様方のあれ程美しい御生涯について、知らせてやりたいと云ふ願ひを抑へても、おさへかねるのでゐます。神々様僕があなた様方を崇めます心は本當に貧しいくものでゐます。(涙ぐみ。)此の私の捧けた心をお受け下さいませ。もし御心に適いますならば、此の原稿を梓に上らせて下さいませ。御心に適いませんならば焼き捨てる事を決していとひません。何卒御心をこの僕に御示して下さいませ。(間)神々様何卒私に知慧を授けて、私がつと正しく子供達を導びく事が出来る様に賢くして下さいませ。あまり間違が多すぎでは本當に恐ろしゆうみます。何卒子供達のすこやかな生長をお守り下さいませ。あ、神々様子供達の僕のまはりに群れ遊んでゐる様を見ますれば、玉をつらねた様に愛しく、いつくしく思ひます。彼等の爲に祈らないではゐられません。(急に涙をこぼす。)あ、神々様私は申譯ゐません。お預りした二人の子供を私の不注意から殺してしまひました。私は死んでもつぐのう事の出来ない罪人でゐます。何卒許して下さいませ。(しばらく泣き續ける。)せめて私は残る生涯を眞心を盡

して、子供達に捧げる事で、二人の子供や、氣の毒な親達や、神々様におわび申したいと思ひます。尊き神々様、何卒僕がふた、び過ちを犯かさぬやうお守り下さいまし。(間)
(猶黙禱しつゝける。やがて涙にぬれた顔を上げ、一番近くに建つてゐる釋迦の像の顔を仰ぐ。)

(此の時、月雲間を離れ、赤々と像の顔を照す。と松林の奥より、男の子と女の子との二部合唱の聲聞ゆ。)

(教師其の歌の聲を聞きながら、少しうとうと眠りかける。)

(二人の童子と童女。小さき珠を飾りたる冠をかむり、薄き羽衣の裳を曳きて、遊行するか如く、像の後より登場。うやくしく各の像に禮拜し、教師の側に寄り跪きて、教師を拜し、左右より草稿を持ちて、中央の釋迦の像の石壇を登り、像のすぐ前の臺の上に草稿を置く。暫く二人並んで、立ち、頭をたれ、沈黙す。像の額の白毫より、一條の光りさし一瞬間草稿を照し、やがて消ゆ。(間)童子と童女再び禮拜して、靜かに壇を下

り、教師の前に跪き、左右より衣を以て教師をなで、さて再び立ち上りて教師の前に並んで立つ。)

教師。(目を開く。二人の童子と童女を眺め、驚きたる様にて、暫く沈黙。やがて喜びの叫びを上げ。)太郎だ。やつぱりお花だ。(二人に抱き付かうとする。)

(二人の童子と童女、靜かに一足後に退く。)

教師。わしの目の誤りであろうか。

童子。師よ。誤りではムいませぬ、私は今は世に無きあなたの太郎でムいます。

童女。師よ。おなづかしゆふ存じます。あの世に住むあなたのお花でムいます。

教師。お、太郎よ。お花よ。お前達ちであつたか。わしはどんなにお前達に會ひたかつたろう。會つてお詫が云ひたかつたらう。今はどうして暮して居るのか。お前達の其のかがやかしい姿では、さぞ幸福に暮して居るのであらう。

童子。たのしき園にて遊んで居ります。

童女。貴き聖人達のお傍に、朝夕侍して居ります。

教師。お前達のおめぐまれた姿を見て、わしはどんなにうれしいだらう。あの恐しい、死際
の姿の影さへ、今は見えない。わしの務めの怠りから、お前達に――

童子。(遮ぎつて。)仰せられますな。神々が召し給ふたので△います。

童女。すべて攝理で△います。

教師。わしの過ちを許してくれ。

童子。此處では童方のお勤のみが記されるばかりで△います。

童女。過し世のお恵みを數へてばかり居ります。

教師。(涙ぐみ。)神々様有り難ふ△います僕が一對の玉よりも。愛でて居た教へ子と、此の

やうな輝かしい姿で、會せて下さいますとは。

童子。師よ。私は神様のお恵を貴方に傳へる爲に参りましたので△います。

童女。吉き御託宣のお使にまいつたので△います。

童子と童女。(容を正しくする。)

教師。(跪つく。)

童子。神々様仰せらるやう。そなたの企ては我が、心になへり。そなたの心誠に満ちた
れば。

童女。聖者達の仰せらる、よう。そなたの書物は祝福さるべし。そなたの筆貧しければ。

童子。童女。(聲を合せて。)智識の博き故ならず。傳の解しき故ならず。言葉の巧のゆへな
らず。たゞ真心と貧しさの故に△こそ。

(間)

教師。(感動のあまり、たゞ沈黙す。)

童子と童女。(靜かに石壇を上り、像の前より草稿を取り、左右より捧げ持ちて、壇を下り

教師の前に草稿を置く。二人聲を揃へて)善き書物をお祝し申します。(間)さらばつ
ゞがなくおはします。(二人去りかける。)

教師。待つてくれ。太郎。もすこし名残りを惜しませてくれ。お花。楽しい花園の遊びの有り様を話してくれ。

童子。(いとしそうに教師を見て。)師よ。もはや別れの時で△います。

童女。天と地はあまり接きすぎてはなりません。

教師。(沈黙。)

童子。時は來るで△いませう。其の時再び許されて。

童女。天の花園で。地の上にて一度結んだ師弟の縁は、いつまでも渝る事はなく。

童子。美しい果を天に結ぶで△いませう。

(間。)(無数の童子童女の歌ふ聲がすかに松林の奥より聞ゆ。)

童子。迎への者で△います。さらば師よ。まさきくおはしませ。

童女。貴き師よ。つゝがなく。

童子と童女。(消える如く退場せんとす。)

教師。(草稿を押し頂だき、消え行く二人にひかつてしきりに何か叫びかけんとすれども聲出でず。突然舞臺暗黒となる。)

ダーク、チエーンヂ

第三場

(舞臺第一場に同じ。)

教師。(机にすがり消えたる蠟燭の下にて、眠りゐる。窓より月光さし込み、教師の體を半分照らす。)

小使。(提灯を持ちて登場。)あゝ火も消えてしまつて。(側による。)寢て居らつしやる。くたびれなすつたのだらう。あまり勉強が過ぎるから。先生。(ゆり起こす。)うたゝ寝なさと風を引きまするよ。

教師。(目をさます。)あゝ。太郎よ。お花よ。(あたりを見廻し、やうやく自分の地位を意



ト ス リ キ
チンイヴ・ダ・ドルナオレ

識したる如く。あゝ。

小使。お目ざめでムいますか。夜が更けました。うたゝ寝なさつてはお風を召します。

教師。(なほ夢の後を追ひながら。)どうも有り難う。(考へこむ。)

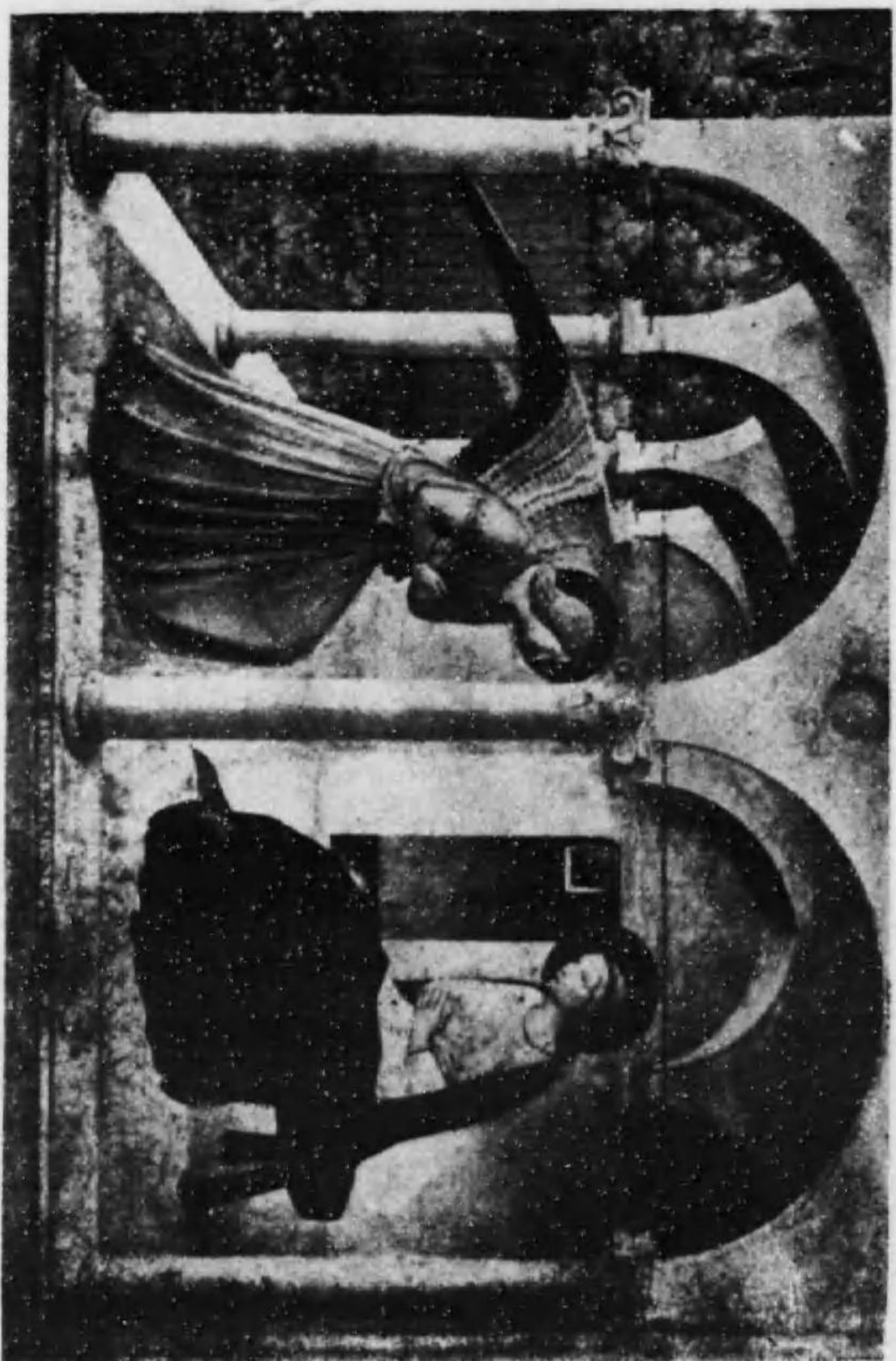
小使。(教師のベットをつくらつてやり。)お休みなさいませ。

教師。爺やお休み。

(小使退場。)

教師。(机の上の草稿を取り上げ胸に抱きしめ。)あゝ、わしはやはり書き続けやう。真心と貧しさで。そして子供達に献げやう。聖人達の貴い生涯の片影でも子供達に傳へる爲めに。死んだ子供の菩提の爲に。(間)(蠟燭に火を點す。)もう一番雞の鳴くの間もないであらう。書き續けて朝を待たう。もう少しだ。明日の曉の最初の光は、出来上つた祝福される草稿を照すであらう。(ペンを取つて書き續ける。)(幕)

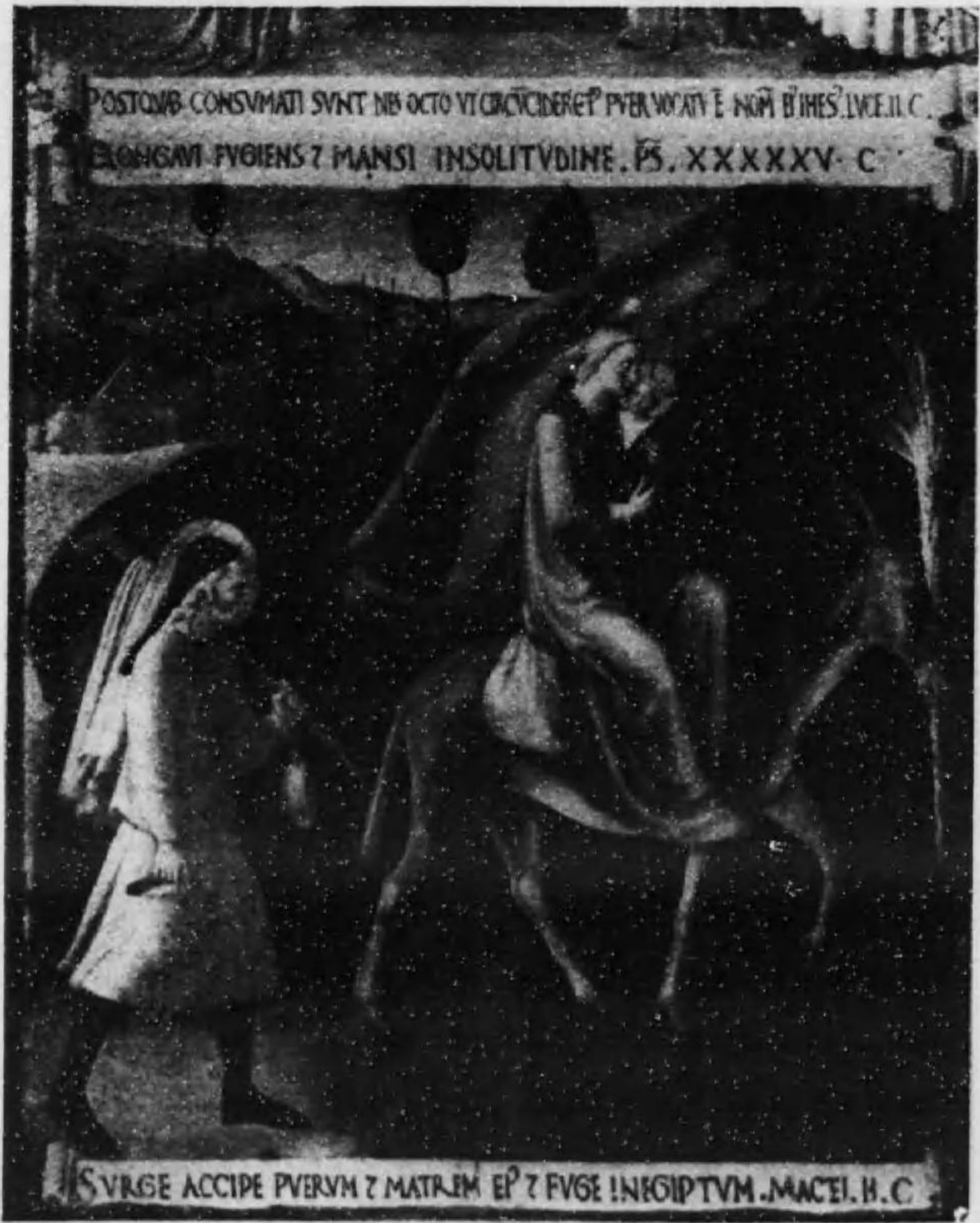
一・九二二・九・五



基督降誕の告知(アッゼリコ)



キリストの降誕(アンゼリコ)



(フ
ラ
ア
ン
ジ
エ
リ
コ)

上途の避逃へトプジエ トスリキ



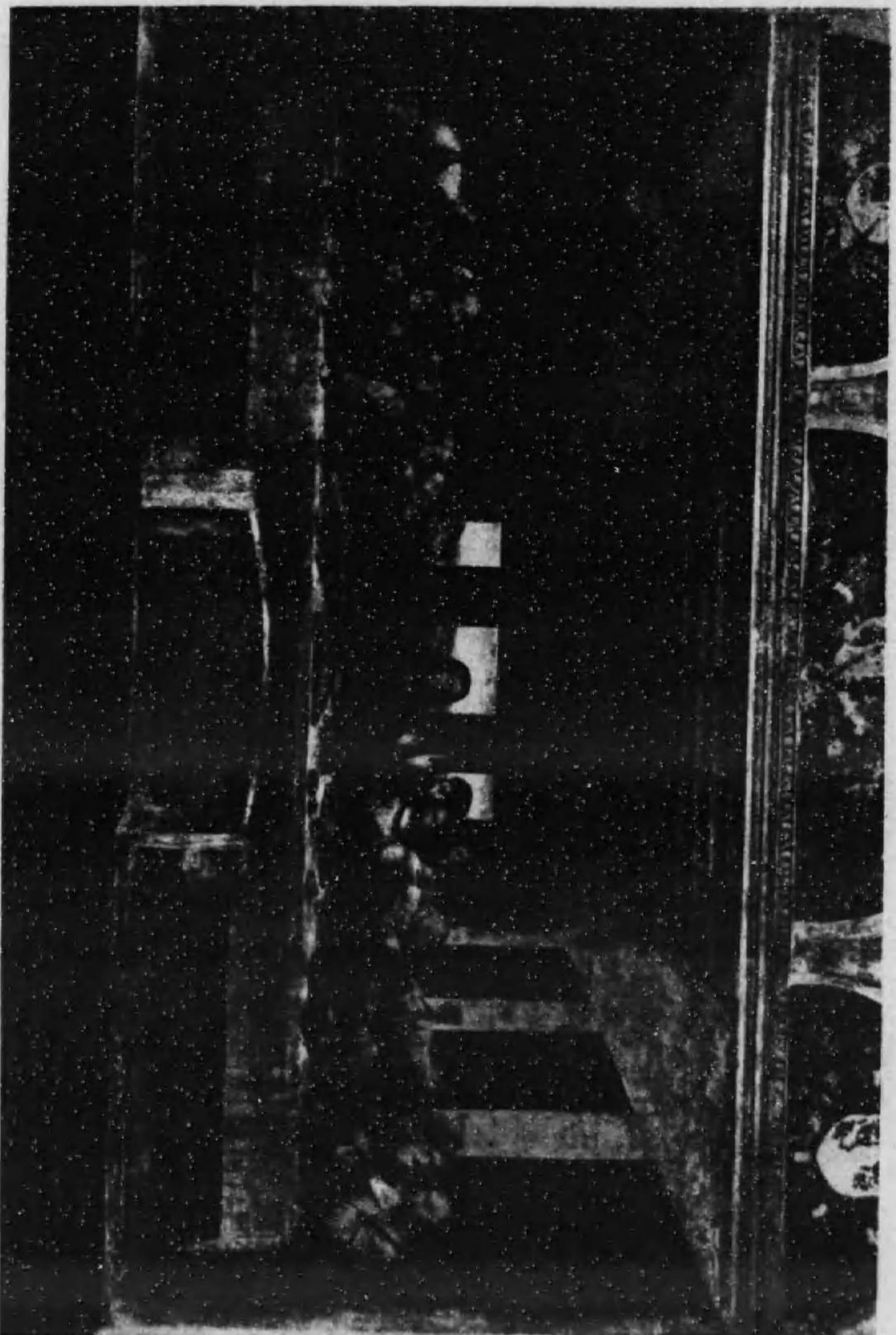


トスリキるす教説
(トセラアソレ)





キリスマスト人盲レを癒す



最 後 の 晩 (チレイヴァダポルチオレ)





リ祈のネマセツゲ
(コ レ ケ)



三本木の十字架架
(トセラゲツレ)





聖フランシス(チマブエ)



フランス裸形の説教(ジョット)



(一) 蹟奇の印烙のスジンラフ
(コ レ ケ)



(二) 蹟奇の印烙のスシラフ
(コ レ ケ)



痕聖のスシムラフ
(コレーク)



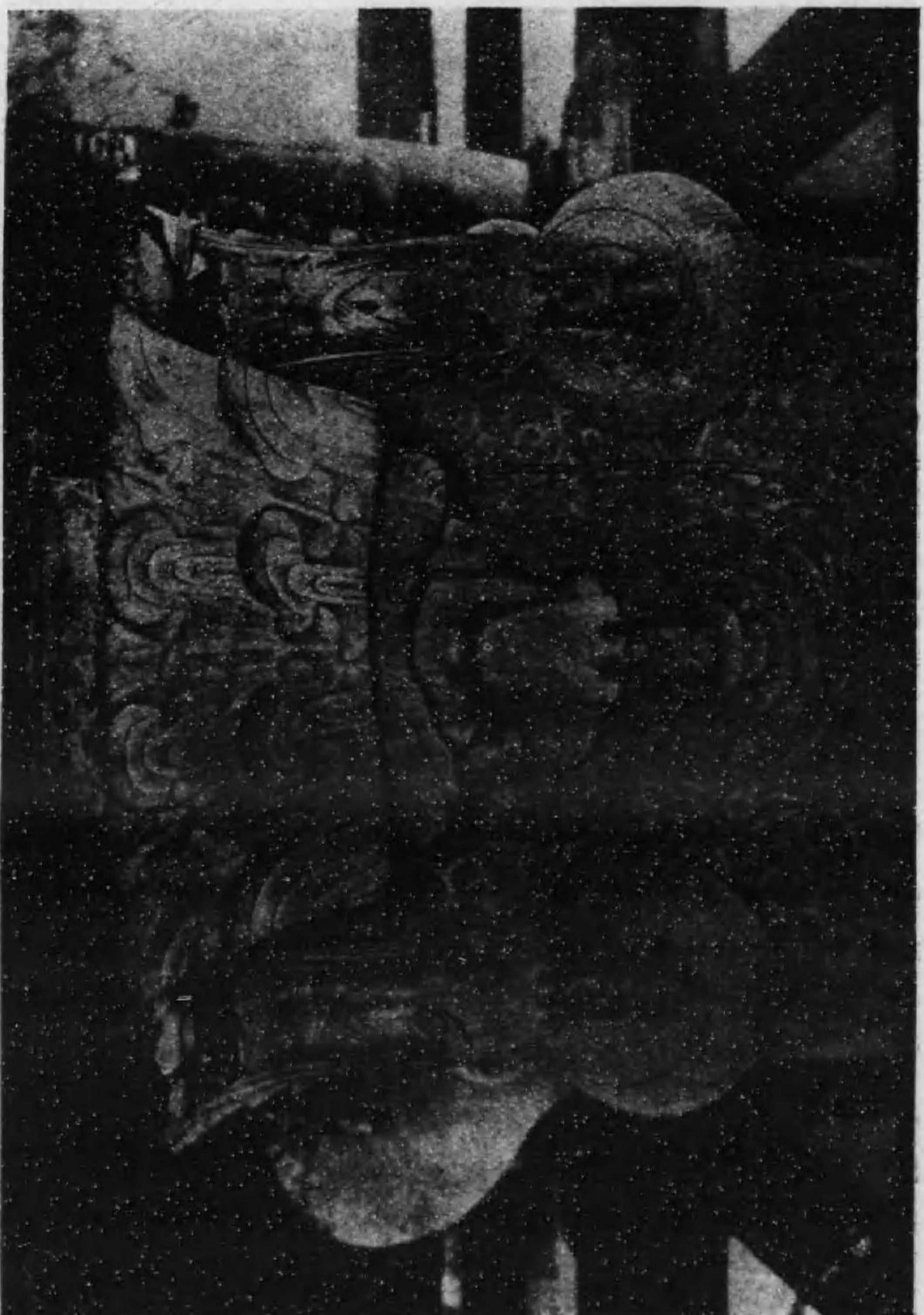
聖フランシスの臨終(ショット)



佛迦釋尊木の庵窟石州慶鮮朝

佛尊三の窟石洞大省西山那友





佛上藥王藥上脇に技佛迦摩の堂金寺隆法
(作利止作鞍)



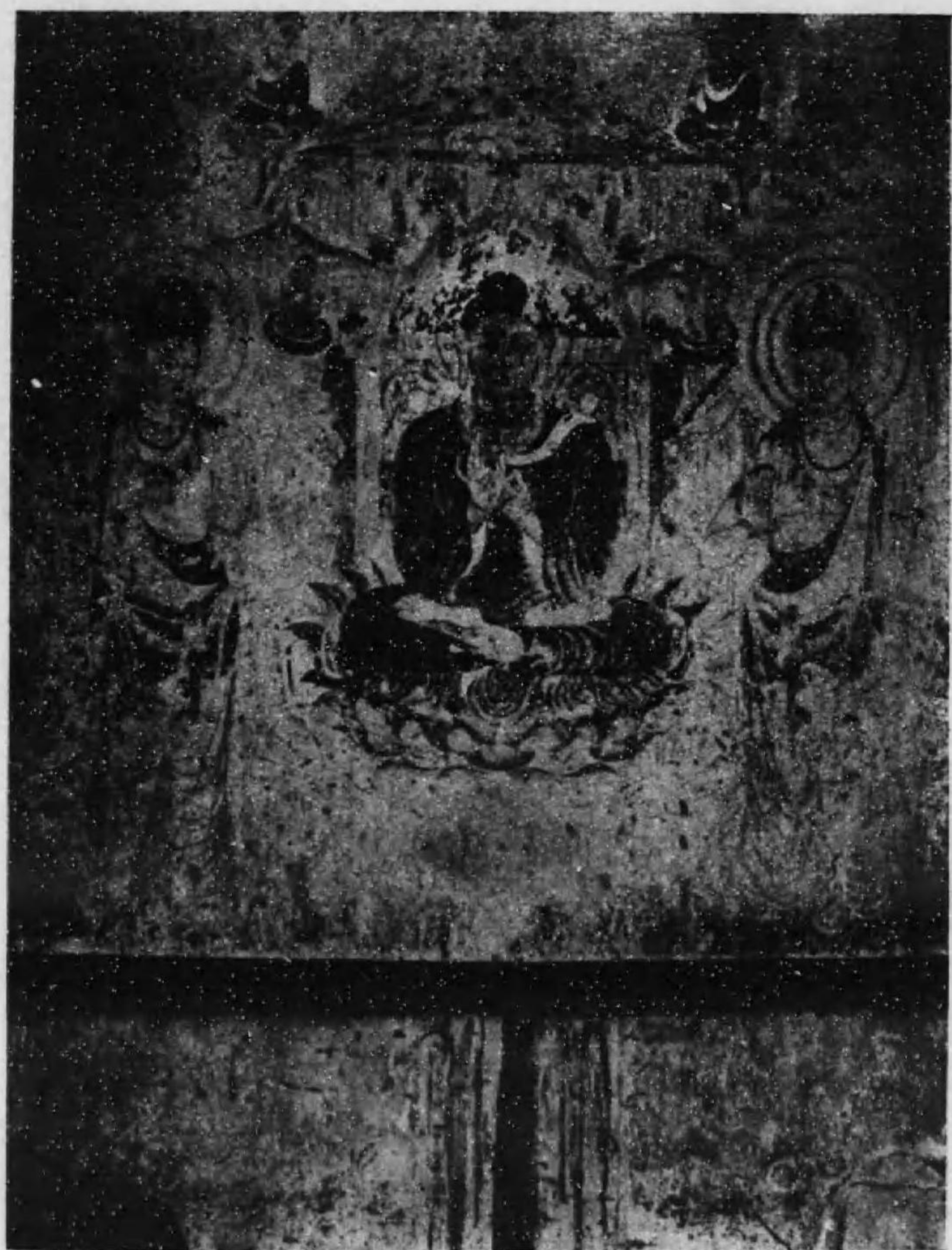
佛師藥堂金寺師藥



音觀輪意如尊本寺宮中



音觀輪意如の殿夢寺隆法
(作子太德聖)



法隆寺金堂壁畫四佛淨土圖

「荒野の光」を出にす就て

先きに世におくつた、拙著「終の花」と、同じ氣持でこの本を書いた。

私は、三十幾年、この世に生存させて頂いたある何ものかに對して、常に感謝の心に満ちて生活して來た。そして私は、何うかしてそのあるものに、本當に素直になつて、本當に謙つて、跪きたい氣持で過ぎて來た。

随分種々様々な境遇に所した私は、その度に、これでもか、これでもかと、ねぢ伏せられた運命の手に玩ばれた。併し私は、その度毎に、一寸のすきを見開いては起き上つた。自分が起き上つたと言ふよりも、ある力、恵みの光、救ひの手にすがつて命を繼いだと言ふ方が本當かと思ふ。

兎も角私は、今迄の生活に於て、酷くある力に打たれながら生きて來たことを、痛切に感じるものである。

その感謝すべき、救ひの總ては、キリストの言葉であつた。佛陀のありがたさであつた。フランシスの生活、その他私にせまつてくる聖者、それら聖者達の生活そのものであつた。足跡の總てであつた。

私は、何時も自分の切羽詰つた氣持から起き上る度に、自分でも、それ等聖者達の言葉、聖者達の生活そのものを、もつともつとハッキリ視つめ、より深く知りたい氣持にさせられた。そして、何うかして後に來る者にも、私の視めたなりに、成るべく地上の生活そのまゝの姿で傳へやうと考へた。

所謂、既成宗教の型としてよりも、何ものにも束縛せられず、總ての變んなものから脱して、純眞に、より純眞に、聖者達にぢかに面接して、私達に感じ得るものを、出來るだけ素直に感じ、そして其れを、出來るだけ色彩を換へずに傳へやうと考へた。

この事は、私は決して無駄事でない氣が強くて來て、ひたすらに其事に考へ入つた。そして、この貧しい自分に許されるだけの力をつくして書いた。

いよく筆を取つて、一人の聖者を書き出し、その稿が終へるまでは、いつも、異様の力に滿されて筆を運んだ。全く稿を終へて翻つて思ふ時に、いろいろの感にせまるものがあつた。キリストを書いてゐる時であつた。キリストが最早最後も近づいて、獄吏にわたされ、世にも痛ましいはづかしめを受けられ、やがて、死の間にとざされやうとする場面を書き續けて、私は或る特別な氣持に導かれた。酷く惡寒を覺えた。併し私は、いつも自分が過分の力を出し切つた時や、風邪などの初めによくあることなので、そう氣にもせず、二日を過した。二日の後全くその事は止んだ。やがて其稿を書き終へた時、ハッキリそれと知つた。全く自分に感じて、キリストの最後のある痛々しい力に左右された事がわかつた。

日が經つに従つて、まざまざその事を考へさせられた。

一人を書き終へる度に、決つてその夜は安眠さへ出來なかつた。聖者の高調した或る力の響きや、一人を終へたと言ふ嬉しさや、色々の昂奮であつた。自分の初な、全く空虚な

心に、或何か及んだことがハッキリ思はれた。

私は常に思つてゐる。此世に生をうけてゐる誰も、必ず或る何ものかの力の圈内に生きてゐることを。そして、その何ものかの力に面接する人程幸福であることを。然かもそれが、教儀の宗教でなく、心の宗教でなければならぬといふ事を。

聖者達の生活そのものから、ぢかに私達にせまつて来るものは、決して教儀の宗教ではない。それでゐて、私達が要求する、人間として當然考ふべき、種々な問題、私達のなやみ、私達の追求する美、私達が超えやうとする運命や、それら總ての人類が飢え渴く如うに求めやうとしてゐる睿智が、泉のやうにそこに流れ出して、私達の正しい心、素直な心に嘯きかける。それを、私達は最も鋭敏に聞かうとするものである。その意味で、此本は誰にもすゝめたく思つてゐる。

併し、今のまゝで完全なものとは思つてゐない、これから後、神の教へにより、恵み深い兄弟により、どの位でも教へられる度に、より完全に近よらせやうと考へてゐる。

そして、後に來る者達と一緒に、合掌しひれ伏して、貧しき私達に嘯きかける聖者達の言葉を聞かうと思ふ。

願くば、今も後も、貧しき者の爲めに、地上にこれらの事の満されんことを。

□

□ 聖者の言葉は、成る可く傳へられてゐるまゝにした、それは聖者をそのまゝ傳へたために。その他の書き方は、自分の氣持に合つたやうに従つた。

□ 随分御忙しい時に、併かも御からだのよくないのにもかゝらず、原稿の或部分を御覽下さつた。倉田百三氏に感謝の意を捧げる。その上、この本にあまる序曲をお書き下さつた事を宣べて、私の嬉しい氣持の一端を表したい。

□ 挿畫を選定したり、支那、朝鮮の佛像の寫眞をお貸し下さつた。木村莊八氏には特に御禮を申し上げたい。

□ 清宮彬氏によつて、又この美しい裝をして世に出る事を、合せ記して記念したく

思ふ。

□ 尙、本をお貸し下さつたり、挿畫をお貸し下さつた諸氏にこゝで感謝の意を表す。
千九百二十一年八月十一日

信州安曇の溪にて 中村亮平

目次

1	序曲「或る教師の夢」……………	倉田百三…卷頭
2	『荒野の光』を出すに就て……………	著者…同
3	キリスト……………	一頁
4	フランシス……………	一〇一頁
5	佛陀……………	一九七頁
6	親鸞……………	二九五頁
7	孔子……………	三三五頁

挿畫目次

- 一、キリスト……………レオナルド・ダ・ヴィンチ
- 二、基督降誕の告知……………フラアンゼリコ
- 三、基督の降誕……………フラアンゼリコ
- 四、エジプトへ逃避する基督……………フラアンゼリコ
- 五、説教するキリスト……………レムブラント
- 六、基督盲人を癒す……………エル、ケレコ
- 七、最後の晩餐……………レオナルド・ダ・ヴィンチ
- 八、ゲツセマネの祈り……………エル、グレコ
- 九、三本の十字架……………レムブラント
- 一〇、聖フランシス……………チャマブエ

一一、フフランシス裸形の説教	ジ	オ	ツ	ト
一二、フランシス烙印の奇蹟	(1)グ	レ	レ	コ
一三、同上	(2)グ	レ	レ	コ
一四、フランシスの聖痕	グ	レ	レ	コ
一五、フランシスの臨終	ジ	オ	ツ	ト
一六、朝鮮慶州石窟庵の本尊釋迦
一七、支那山西省大洞石窟の三尊佛
一八、釋迦佛と脇士藥王藥上像	法	隆	寺
一九、藥師寺金堂藥師佛
二〇、如意輪觀音	中	宮	寺
二一、如意輪觀音	法	隆	寺
二二、四佛淨土圖	法	隆	寺



キ
リ
ス
ト



キリスト



古き都エルサレムに程近い、ダビデの町ベツレヘムの邑を、ある日の夕日も暮れ果て、旅人多く宿る家もなく、さきよよい歩いた、ヨセフとマリヤは、とある旅舎の馬なぞ繋ぐ小舎に泊るより仕方がなかつた。その朝、羅馬の王カエサル、アウグストから詔令を出して、ローマの國とその屬國との戸籍を悉く調べたいといふのであつた。

ダビデ王の家系を受けた、ナザレの木匠ヨセフは、マリヤと共に、それ迄住んだガリラヤの町ナザレを出て、戸籍調べを受ける爲め、故郷のユダヤに上つたのであつた。その夜の事、マリヤは俄に産氣づいて、實に氣高い男の子が生れた、ヨセフは少しは慌てもしたが、一生懸命に手當をして、布に包み、その夜は馬槽に入れておいた。随分寒い夜であつ

た。

今から殆んど二千年の昔、アジヤの西の果、地中海の東岸、橄欖の繁るバレスチナの地に、キリストは斯うして此世に降誕せられた。

□

これより先、處女マリヤのもとに、神様の使ガブリエルがつかはされて、

「めでたし、恵まるゝ者よ、主なんぢと偕に在せ。」

と言はれたので、どうした事かと、ヘンに思つてゐると、言葉をついで、

「マリヤよ、懼るるな、汝は神の御前に恵を得たり。視よ、なんぢ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし、彼は大自然、至高者の子と稱へられん……。」

「聖靈なんぢに臨み、至高者の能力なんぢを被はん。此の故に汝が生むところの聖なるものは、神の子と稱へらるべし……。」

マリヤは實に不思議がつてゐると、本當に天の使の言葉通り、身重になつたので、氣にはな

つたが神様のお告げ通り信じて、つゝしみ深く日をおくつた。

その事を知つたヨセフは、随分氣にした。併し義人であつたから、人知れず離縁までしやうとした。その時神様の使が、夢に現はれて、

「ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るゝ事を恐るな。その胎に宿る者は聖靈によるなり。かれ、子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり。」

と言つた、睡より起きたヨセフも、その神様のみ旨に従つて、正しい暮しをつづけた。そして生れた子をイエスと名づけた。

□

斯うして此世に生を受けたイエスは、供なはれてナザレに歸り、そこで幼き時を過した。ヨセフの仕事に従つた。實にしとやかなマリヤと、謙遜で正直なヨセフとの愛に浸つて成長した。

殊に芝卉などに富み、自然の惠澤の頗る豊かなナザレの地は、深きあるものを與へたであら

あまり多くの知識は得なかつたが、深い知慧をやどしてゐた。そてし年月のたつとも、いやまして神と人との愛せられた。

キリストが十二歳の時であつた、ユダヤ人の慣習によつて、両親と逾越の節に、都エルサレムに上り、エルサレムの神殿に詣で、犠牲の小羊を捧げていよく成人となつた。

お詣りがすんだので、ヨセフとマリヤが歸りかけた時キリストの姿が見えなくなつた。どう見付けてもわからないので、引き返して神殿に戻つて探した。とうとう三日目に、キリストが、宮殿の中で老先生達と何事が議論してゐた、何か聖書のわけでも質してゐたのであらう。談してゐる間に、老學者達は、随分色々の事を教へられたといふ事がある。

その時探し廻つたマリヤが、

「まあどうしたのか、お前のお父さんと私が、どんなに心配して探しまわつたか知れない。」と云ふをきいたキリストは、

「何故に我を尋ぬるか、我は、我が父の家に在るべき事を知らざるか」と實に堂々と、純潔に、

熱心におかし難いものがあつた。

キリストはこの時分から、自分を眞實に知つて、自分に負はされた神様からのみ旨をハッキリ現さねばならぬ事を、早くも身にしめてゐた。

そうして靜かな村に平和な月日をおくつた。

□

キリストは生れて三十年、エルサレムの宮殿に老學者と話をしてから十八年、その間全く黙つて日を過した。木匠の職をもつて、此世にありとあらゆる事を身にしめた。少しも議論や、學問ではない。三十年後のキリストを考へることの出来ない位黙つて暮した。

この沈黙があつたから、あの偉大なキリストがあつたとも云はれやう。兎も角私達はこの十八年の沈黙を忘れたくはない。

何事にも耐え忍ぶ力を養ひ、出来るだけ自分の知慧を成長させ、力のあらん限り神様のみ旨をこの地上におろして、雄々しく闘を續けた準備の時であつた。實に貴い靜默の十八年であつ

た。

キリストが三十歳になられた時、ガリラヤを出てヨルダン河に來た。そしてヨハネにバプテスマを受けやうとした、するとヨハネは、

「私は貴方からバプテスマを受くべき筈なのに、反つて私からお受けなさろうとするのですか？」

イエスはすぐ答へて、

「今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく爲遂ぐるは當然なり。」と、

ヨハネはとうとう許して、キリストにヨルダン川の水でバプテスマを授けた。

此人をバプテスマのヨハネと云ひ、身には駱駝の毛衣を着、皮の帯をしめて、曠野に住んでゐた。そして蜂と野蜜を食べものにしてゐた、よくユダヤの野に出て、

「天國は近づいた。悔改めよ。」と宣べ傳へてあるき廻つた。

併して多くの人がバプテスマのヨハネに集つた、悔改めのしるしに、皆ヨルダン川に行つて、バプテスマを受けた。

□

キリストは御靈によつて、荒野に導かれた、獸達と一緒になつて、四十日四十夜何もたべずに通した。そして酷く飢ゑた。この時悪魔があらはれて、キリストを試みた、「貴方が若し神の子ならば、この石をバンとせられよ」と言つて、悪魔は一つの石を出した。

キリストはすぐ答へて、

「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」と、

すると悪魔はまいつてしまつて今度は、イエスをエルサレムの都につれて行き、宮殿の屋根の上に昇らせて、「貴方が若し神の子ならば、自分の軀を下に投げてごらん。きつとお前の御使たちは貴方を、石の上に落さない様にしてくれるでせうから」と言つた。

キリストには言葉終らない中に、

「主なる汝の神を試むべからず」とはねつけた。

悪魔は中々めけず、今度はキリストを高い山につれ行き、多くの國々が、富み榮えてゐるを目のあたりにして、「貴方が若し平伏して私を拜めば、此等の國々をみな貴方に差上げませう」と、キリストは直ちに三度言葉をきつて、

「サタンよ退け、「主なる汝の神を拜し、たゞ之にのみ事へ奉るべし」と記されたるなり」

と、三度ともあんまりハツキキリストの心を表はされたので、悪魔はそこそこにして立ち去つてしまつた。

ある時パリサイの人とサドカイの人が来て、キリストを試みた。

「貴方がキリストであるといふ、天からの徴を見せて下さい」と詰ふた。

キリストはすぐ答へて、

「夕には汝ら「空あかき故に、晴ならん」と言ひ、また朝には「空赤くして曇る故に、今日は風雨ならん」と云ふ。なんさら空の氣色を見分くる事を知りて、時の徴を見分くる事能はぬか……。」

と、被仰られて立ち去つた。空模様で天氣は分るが、一寸先に何が起つてくるそれはわからぬ。

此の世の人達は徴ばかりを氣にしてゐるが、こまつたものである、との意であらう。兎も角こうしてキリストは常に試みられた。

或時學者とパリサイの人らが、一人の女をとりまいて随分騒がしくやつて来た、そして云ふ事に「先生、この女は身持がわるいんで捕へられたんです。モーゼの律法には、斯う云ふものは石にて打てよと、私達に命じてありますが、先生はどうなさいますか？」

そして若しキリストの答への如何によつては、訴へる種としやうと試みたのだ。

その時キリストは忙しく答へやうともせず、軀を屈め指で土の上に何か書いてゐた。するとしつこく問ひつめて止まないの、キリストは起きて、「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」と言つて、再び身を屈めて一心に土の上に字を書きつけた。

彼等はこれを聞いて、全く良心に責められたのであらう、老人から若い者まで、一人去り、

二人出で、暫くの間に全く立ち去つて、唯キリストと、とりまかれてゐた女ときりになつた。

キリストは靜かに軀を起して、女より外に誰もゐないので言葉をきつて、

「女よ、汝を訴へたる者どもは何處にをるぞ、汝を罪するものなきか。」
するとその女が、その言葉の下から、

「主よ誰もなし」と言つた。

その時イエスの言い給ふには、

「われも汝を罪せじ、往け、この後再び罪を犯すな。」と、

或時キリストが、エルサレムの宮で、人達に教へ、福音をのべ傳へてゐた、その時祭司長や學者達や長老どもが集つて来て、

「なんの權威をもつて、そう教へを述べるのでありますか、一體この權威を授けた者は誰ですか私達に知らせて下さい」と問ひつめるのであつた。

キリストは答へて言ふ事に、

「われも一言なんぢらに問はん、答へよ。ヨハネのバプテスマは、天よりか人よりか」

と問はれた、學者や、長老や祭司長等は、互に論じ合つて、「天より」と言へば「そんなら何故信じないのか」と言はれるし、そうかと言つて、「人より」と云へば、人民達がみなヨハネを預言者と信じてゐるから、私達を石で撃つであらう」と言つて。とう／＼何れからか知らない事を答へなければならなかつた。

キリストはそれを聞いて、

「われも何の權威をもて此等の事をなすか、汝らに告げじ」と云つた。

こうして何時の試みにも、ちやんと切り開くことが實に自由に出來た。

キリストの受難に近い頃の事であつた、エルサレムの宮にゐると。パリサイの人々や、サドカイの人々が集つて、どうかしてキリストを言の良に係けやろと相談して。パリサイの人はその弟子達とヘロデの黨の者どもと共に、キリストの所に遣して、

「先生、貴方が眞實のことをしていらつしやる事を知つてゐます、それから眞心から神様の道を教へていらつしやることも知つてゐます、且誰でもを憚りたまふ事のないことも知つてゐます、人の外見ばかり見ていらつしやらないから……そこでお聞きしたいんです、貢をカイザルに納むるは可いんですか、如何お思ひですかお教へ下さい。」と言つた。

キリストはこれは酷くひねくれて試みに来たものだと思つて、

「偽善者よ、どうぞ我を試むるか、貢の金を我に見せよ」と言つた、すると彼等はデナリといふ銀錢を持つて来て、見せた。

キリストはその銀錢を指して、

「これは誰の像、たれの號なるか」と聞いた。

彼等は口を揃えて、「カイザルの像です」と答へた、この時キリストは言つた。

「さらば、カイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ。」

彼等はこれを聞いてどうする事も出来ず、イエスを離れて去つて往つた。

するとサドカイの人達もしきりにキリストを試みた。けれどもちやんと教へをハツキリさせるので、彼等はどうする事も出来なかつた。

キリストは斯うして死に至るまで、試みの中に闘ひの生活をつゞけた。こゝに書いたものは世に傳へられたうちのことに目だつたもののみだ、細かにこれを探し得たならば、實に多くの試みの記録を見出すであらう。

□

キリストが最初の誘惑に克つた頃、ヨハネが二人の弟子とヨルダン河のほとりにゐると。向ふからキリストが歩いて来た。ヨハネは弟子に向つて、

「此の世の罪を負ひ清めてくれる神様の羔羊をござらん」と言つた。

ユダヤの國では、神様に罪の赦しを乞ふ時は、きつと小羊を献けるといふ習慣になつてゐた

ので、ヨハネはイエスキリストを神の羔羊と云つたのだ。

二人の弟子はキリストの傍に近寄つた。するとキリストは振り返つて、従ひ来た二人を見つめて。

「何を求むるか」と言はれたので、

二人はおそれながら、「ラビ、何處にお留りなさいますか」と伺ふと。

キリストは答へて言ふ事に、

「きたれ、然らば見ん。」

そこで二人は尙も従ひ行き、その留り給ふ所を見て、とう／＼その時から弟子になることにした。丁度午後の四時頃であつた。

その一人はアンデレと言つて、のちに十二使徒となつた一人だ。

アンデレは自分の兄弟のシモンにも、是非キリストに逢はせたく思つて、尋ね出して「私達はメシヤに逢ひました」と言ひながら彼をキリストの許に連れてきた。

するとキリストは目を注められて、

「汝はヨハネの子シモンなり、汝ケバと稱へらるべし」と言はれた。

(ラビといふのは先生といふ事で、メシヤはキリストといふも同じで、救ひ主と云ふ意味だ。バケはペテロといふも同じだ。)

このアンデレとシモン(ペテロ)こそキリストの最初の弟子であつた。

又ある本には——キリストがガリラヤの海邊を歩いてゐると、アンデレとシモン(ペテロ)との兄弟が、海に網を打つて居るのに出逢つた。

これを見て言ひ給ふことに、

「われに従ひ來れ、然らば汝らを人を漁る者となさん。」

彼等は直ちに網を捨て、キリストに従つた、そして二人は弟子になつた。——とも書いてある。

明くる日キリストはガリラヤに往かうとして、その途中ピリポに逢つた、ピリポはアンデレとペテロとの町ベツサイダの人である。非常に熱心に道を求めてゐたのですぐ弟子になつた。

それから尙もガリラヤの海の岸を歩いて行くと、漁りをして生活してゐるゼベダイの子ヤコ

ブと、その兄弟ヨハネと舟の中で網を繕つてゐた、キリスト之れを見てこの二人も後になつて世のためになる人である事を知つて、直ぐおよびになつた、すると二人は喜んでキリストの前に跪き、その教を受け弟子になつて従つた。のこした舟には、人を頼んでお父さんを助けて貰つて、自分達二人は教への道についた。

それからピリポの友達にナタナエルといふ人があつた、途中で逢つたので、ピリポはナタナエルに近よつて言つた。

「私達は、モーセの律法に録してある人に逢つたよ。預言者たちが録した人、ヨセフの子のナザレのキリストに……」それを聞いたナタナエルは、昔からあまり評判のよくないナザレからどんな人が出たかと不思議がつて、大した事はないと思つてゐると。ピリポが「まあ來たまへ」と言つた。

此時キリストはナタナエルが自分のそばに來たのを見て、

「**視よ、これ眞にイスラエル人なり、その裏に虚偽なし**」と云つた。

ナタナエルはあまりにだしぬけの言葉にあきれて、色々のことを問答した。その時キリスト

は、

「まことに誠に汝らにつぐ、天ひらけて人の子の上に神の使たち昇り降りするを汝ら見るべし」と言つた。

キリストは此時から世に教へを宣べ傳へ始めた、そして言ひ給ふて、

「なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり」と。

その後キリストは、山に登つて祈つた、御意に適ふ者を召さうと思つて、夜明けまで祈りをつづけた、夜明けになつて弟子達を呼び寄せた、その中から十二人撰んで使徒と名づけた。御側近くおき、教を宣べさせたり、悪魔を逐ひ出す權威を用ひさせようとしたのだ。

十二使徒は、ピリポ、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、バルトロマイ、トマス、マタイ、アルバヨの子ヤコブ及びタダイ、熱心黨のシモン、イスカリオテのユダ等である。

世を終るまでこの十二使徒と教を宣べ傳へた。

新しく各村々に二人づゝ遣した、その旅装はと見るに。杖一つの外は、食物も、旅囊も、お

錢さへ持たず、二枚の下衣をも着ない様にして、草鞋ばかり履いて出かけた。雨がけに、キリストは弟子達に、

「何處にても人の家に入らば、その地を去るまで其處に留れ、何處にても汝らを受けず、汝らに聽かずば、其處を出づるとき、證のために足の裏の塵を拂へ」と、
そして弟子達は出で往きて、悔改むべきことを宣傳へた。

□

キリストは己に十二歳の時に、この世に教をのべ傳へる自覺を以てしたのであらう、しかし十八年の静黙においてあらゆる準備をした。そして今や猛烈に世に立ちて宣べ傳へやうとした。キリストの教を聞いた人は、誰も「未だ斯人の如く語りし人あらず」と言つたと云ふ。實に權威を持つて口を開いた。キリストそのものがすでに神そのものであつたからでもあらう。一言葉々々に眞理そのものであつた。實に自信を持つて、「我を信ぜよ。」「我に従へ。」「我は眞理なり。」「試に實に我汝等につぐ。」と云ふ如うに、その言葉の中にとても得る事の出来ない崇

高な空氣をおくつて、神さながらの感じを與へた。

ゼベダイの子、ヤコブとヨハネとを従へて、後キリストはカペナウムに行つた、そして安息日に教會堂に入つて教を説いた。初めて聽いた人々は驚き入つて仕舞つた。學者の如うにむやみにむつかしい事を謂はず、實に明かに理りやすく、それでゐて實におかす事の出来ない權威を示した。

その時教へを聽いてゐた一人に、靈の穢れた人がゐて、色々な事を問ひかけて叫ぶので、キリスト禁めて言つた。

「黙せ、その人を出でよ。」

すると穢れた人は痙攣を起して、大聲を上げて出て行つた。居合せた人達は皆驚き、顔を見合せて、「どうした事か？ 權威ある新しい教へぢやありませんか、穢れた靈でさえ、命令すれば従ふことを」と云ひ合つた。

この事があつてから後、早くもこの噂がガリラヤの四方に弘まつた。

マリサイの人でニコデモと云ふ人があつた、ユダヤ人の宰であつた。人に知れない様に思つてか、夜キリストの許に来て教を乞ふた。

「先生、私は、貴方が神様からお遣しになつた人だといふ事を知つてゐます、若し神様のお遣しになつた方でなければ、貴方のおやうになる如うな事は出来ませんから。」とヘンにわかつた如うな事を言つたので、それを氣にしたキリストは答へて。

「まことに誠に、汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の國を見ること能はず」と言はれたので黙つて、聽いてゐたニコデモはどうもわからないので、「先生、若し年老いた人は、どうして生れることが出来ませう、再度母の胎に入ることはとても出来せんからと云つて自分の不思議があつた通り問ひ返せば。

キリストは直ぐ様、

「まことに誠に汝に告ぐ、人は水と靈によつて生れずば、神の國に入ること能はず、肉によりて生るゝものは肉なり、靈によりて生るゝものは靈なり、なんぢら新に生るべしと我が汝に

言ひしを怪しむな。風は已が好むところに吹く、汝その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。すべて靈によつて生るゝ者も斯のごとし。」

と教へられたのに、どうもよくわからないので、ニコデモは、「どうして、そんな事がありませうか？」と云ふので、

キリストは三度教へを説いた。

「なんぢはイスラエルの師にして猶かゝる事どもを知らぬか。誠にまことに汝らに告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを證す、然るに汝らその證しを受けず。われ地のことを言ふに汝ら信ぜずば、天の事を言はんには争で信せんや。天より降りし者、即ち人の子の外には、天に昇りしものなし。モーセ荒野にて蛇を擧げし如く、人の子も亦擧げらるべし。すべて信するものゝ彼によりて、永遠の生命を得ん爲めなり。」と、
そして尙も色々の事を説いた。

ある時キリスト多くの人達の集つてゐるのを見て、山に登つた、すると多くの人達はキリス

トの許によつて教を聴いた。

此時キリストは、實に崇高なおも、ちして説き初めた。後の世に山上の垂訓と云はれて、神の教への總てをつくしてゐる、世界をあかるくするとも言はるべきものであらう。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。」

幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。

幸福なるかな、柔和なるもの。その人は地を嗣がん。

幸福なるかな、義に飢え渴く者。その人は飽くことを得ん。

幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。

幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。

幸福なるかな、平和ならしむもの。その人は神の子と稱へられん。

幸福なるかな、義のために責められたる者。天國はその人のものなり。

我がために人、なんぢらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。」

「汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何をもてか之に鹽すべき、後は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。」

「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし」とすべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄弟に對いて、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。また痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。この故に汝もし供物を祭壇にさぐる時、そこに兄弟に怨まる、事あるを思ひ出さば、供物を祭壇のまへに遺しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち來りて、供物をささげよ。なんぢを訴ふる者とともに途に在るうちに、早く和解せよ。恐くは、訴ふる者なんぢをなんぢを審判人にわたし、審判人は下役にもたし、遂になんぢは獄に入れられん。誠になんぢに告ぐ、一厘も残りなく償はずば、其處をいづること能はじ。」

「姦淫するなかれ」と、すべて色情を壞きて女を見るものは、既に心のうに姦淫したるなり。もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに往かぬは益なり。」

「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と、一切ちかふな、天を指して誓ふな、

神の御座なればなり。地を指して誓ふな、神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。己が頭を指して誓ふな、汝頭髮一筋だに白くし、また黒くし能はねばなり。たゞ然り然り、否否といへ、之に過ぐるは惡より出づるなり。』

『目には目を、齒には齒を』と。惡しき者に抵抗ふな。人もし右の頬を打たば、左をも向けよ。なんぢを訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。人もし汝に一里ゆく事を強いなば、共に二里ゆけ。なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。』

『なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし』と。汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん爲めなり。天の父はその日を惡しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり。なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。』

『施濟をなすとき、偽善者が人に偽善者が人に崇められんとて會堂や街にて爲すごとく、己が

前にラツバを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施濟の隠れん爲なり。然らば隠れたるに見たまふ汝の父は報ひ給はん。』

『なんぢは祈るとき、己が室に入り、戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給ふなんぢの父は報ひ給はん。』

『この故に汝らは斯く祈れ。』

天にいます我らの父よ、

願くは、御名を崇められん事を。

御國の來らん事を。

御意の天のごとく、地にも行はれん事を。

我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。

我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。

我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出したまへ。』

「汝等もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給はん。もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失を免し給はじ。」

「なんぢら己がために財寶を地に積むな、ここは蟲と錆とが損ひ、盗人うがちて盗むなり。なんぢら己がために財寶を天に積み、かしこは蟲と錆とが損はず、盗人うがちて盗まぬなり。なんぢの財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。身の燈火は目なり。この故に汝の目たゞしければ、全身あかるからん。然れど、なんぢの目あしくば、全身くらからん、若し汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。人は二人の主しゅに兼事ふる事能はず、或はこれを憎み、かれを愛し、或はこれに親しみ、かれを輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼事ふる事能はず。この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まん、何を着んと體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひ給ふ。汝らは之よりも遙かに優る、者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。又なにゆる衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何にして育つかと思へ、勞せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極

めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、爐に投げ入れられる草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝らをや、あ、信仰うすき者よ。さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふな。是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物は汝らに必要なるを知り給ふなり。まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。」

「なんぢら人を審くさばな、審かれざらん爲なり。己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて己も量らるぐし、何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、己が目にある梁木うつつばりを認めぬか。視よ、おのが目に梁木あるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや。偽善者よ、まづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。」

「聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな。恐くは足にて踏みつけ、向き反りて汝らを噛みやぶらん。」

「求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求むる者は得、たづねる者は見出し、門を叩く者は開かるるなり。汝らのうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ、魚を求めんに蛇を與へんや。然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや。然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。」

「狭き門より入れ、滅にいたる門は大きく、その道は廣く、之より入る者おほく。生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。」

「僞豫言者に心せよ、羊の扮装して來れども、内は奪ひ掠むる豺狼なり。その果によりて彼等を知るべし。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。斯く、すべて善き樹は善き果を結び、惡しき樹は惡しき果をむすぶ。善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹はよき果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらる。然らば、その果によりて彼等を知るべし。」

我に對ひて主よ主よといふ者、ことごとくは天國に入らず、たゞ天にいます我が父の御意を

おこなふ者のみ、之に入るべし。その日おほくの者、われに對ひて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひだし、汝の名によりて多くの能力ある業をなし、にあらすや」と言はん。その時われに明白に告げん「われ斷えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れざれ」と。」

「さらば凡て我がこれらの言をき、て行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。雨ふり流漲り、風ふきて其家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。すべて我がこれらの言をき、て行はぬ者を、沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。雨降り流漲り、風ふきて其家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし。」

キリストこれらの言を語り終へた時、群衆はその偉大なものに驚かされた。

ある時多くの人達が、こんな偉大な人に、なせて貰つただけでも、幸福になれるだらうといふので、キリストの下に幼児らを連れて來た、すると弟子達は、こんなに子供ばかり集つたところで仕様もないと思つたのか、連れて來た人達に斷りはじめた。之を見たキリストは大變

にいきどほつて、

「幼児等の我に來るを許せ、止むな、神の國は斯くのごとき者の國なり。誠に汝らにつぐ、凡そ幼児の如くに神の國を受くる者ならずば、之に入るに能はず」斯て幼児を抱き、手をその上におきて祝し給ふた。

キリストはこうして、幼児の爲めに特別な考をめぐらして祝福した。

キリストは「富める人」について、特別の教へを垂れた。

「富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通る方反つて易し」と實にハッキリと示された。私達は富むといふ事を單に「もの」の富だけに考へたくはない。あらゆる富は私達に多くの試みを與へて下さると思つて、總てのこと足りた時にみなされた心を引きしめて、その富からいけないものをにぎみ出させたくはない。

キリストある時、逾越節も済み、ユダヤを去つて、復ガリラヤに往き給ふた。ガリラヤに往くにはサマリヤを経なければならなかつた、サマリヤのスカルと云ふ町に入つた時に、ヤコブ

の泉のそばで休んだ。この町やヤコブがその子ヨセフに與へた土地に近く、そこにヤコブの泉があつた。

ヤコブの泉で休んだ時は丁度正午頃であつた。サマリヤの或女が水を汲みに來たので、キリストは、「われに飲ませよ」と云ひたまふた。弟子は食物を買ひに行つて一人もゐなかつた。やがて靜かになつた時にその女がキリストに向つて言つた。「貴方はユダヤ人であるのに、どうしてサマリヤの女なんかの妾に、飲むことをお求めですか」と。この時は、ユダヤ人とサマリヤ人とは交りをしなかつたから。キリスト答へて言ふ事に「なんぢ若し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」といふ者の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に生ける水を與へしものを」するとその女が「先生、貴方は汲む物もお持ちにならないし、井は深いのにその活ける水は何處かうお汲みですか。貴方はこの井を私達に與へた。私の父のヤコブよりもえらいんですか？。ヤコブも、その子らも、その家畜も、みなこの井で飲んだのです」と言つた。

イエス答へて言い給ふに、

「すべて此水をのむ者は、また渴かん、然れども我が與ふる水を飲むものは、永遠に渴く事なし。わが與ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし。」

女は之れを聞いて、「先生、私達もこれから渴くこともなく、又汲みにも来ないやうに、したいのです、どうかその水を私にも下さい」とねだられたので、キリストは答へた。

「ゆきて夫をここに呼びきたれ」と、言はれたので、「わたしには夫はありません。」と女は答へた。

それを聞いたキリストは、

「夫なしと云ふは宜なり、夫は五人までなりしが、今あるものは汝の夫にあらず。無しと言へるは眞なり。」と、

そこで女は感じ入つて、

「先生、私は貴方を預言者と思ひます、私達の祖先達は、此山で神様を拜みましたが、貴方はエルサレムで神様を拜むのだと被仰いますんですか？」

キリストは此時言つて、

「をんなよ、我が言ふ事を信ぜよ、此山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拜する時きたるなり、汝らは知らぬものを拜し、我らは知るものを拜す、救はユダヤ人より出づればなり。されど眞の禮拜者の、靈と眞とをもて父を拜する時きたらん、今すでに來れり。父は斯のごとく拜する者を求めたまふ。神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり」黙つて聞いてゐた女が再び言ふ事に、

「妾はキリストといふ、メシヤの來る事を知つてゐます、キリストがきたられたら、色々な事を私達に教へて呉れるであらうと思つてゐます。」

そのことを聞いたキリストは黙つても居きせず、

「なんぢと語る我は、それなり。」と、

そこで女はすぐに町に行つて多くの人達をよんできた、この事を聞いたサマリヤの人達はキリストを信じる様になつた。

カペナウムにゐた時の事、キリストが家に入つて弟子達に、「なんぢら途すがら何を論ぜしか」と問ふた。併し弟子達は黙つてゐた。

この日、途々誰が一番豪いだらうと、互に争つて来たからであつた。

キリストはやがて坐について、十二人の弟子をよんだ。そして、

『人もし頭たらんと思はゞ、凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし。』と言いなから幼児を抱いて、彼等の仲間の間につれて来て、『おほよそ我が名の爲めに斯る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣し、者を受くるなり。』

『されば誰にても此の幼児のごとく己を卑うする者は、これ天國にて大なる者なり。』

『然れど我を信する此の小さき者の一人を躓かする者は、寧ろ大なる礫石を頸に懸けられ、海の深處に沈められんかためなり。』

『もし汝の手、または足、なんぢを躓かせば、切りて棄てよ。不具または蹇跛にて生命に入るは、兩手兩足ありて永遠の火に投げ入れらるるよりも勝るなり。もし汝の眼、なんぢを躓かせば抜きて捨てよ。片眼にて生命に入るは、兩眼ありて火のゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。汝ら慎みて此小さき者の一人をも侮るな、我なんぢらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり。汝等いかに思ふか、百匹の羊を持てる人あらん

に、若しその一匹まよはば、九十九匹を山に遺しおき、往きて迷へるものを探ねぬか。若し之を見出さば、誠に汝らに告ぐ、迷はぬ九十九匹に勝りて此一匹を喜ばん。斯のごとく此小さき者の一人の亡ぶるは、天にいます汝らの父の御意にあらず。』

と、尙色々の教へを宜べられた。

この時ペテロが御許に来て、『先生、わが兄弟が私達に對つて罪を犯したら、幾度赦したらいいでせう。七度までですか。』

『否、われ七度までとは言はず、七度を七十倍するまでと言ふなり。』と言はれた。

ある時、エルサレムの宮に禮拜しやうとして来た、ギリシヤ人が數人、ピリポとアンデレに頼んで、キリストに調えたいことを願つた。

そして皆でキリストのところに行つた。どうかしてお會ひしたかつた事を述べると。

キリストは言ふ事に、

『人の子の榮光を受くべき時きたれり。誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麥地に落ちて死なず

ば、唯一つにてあらん、もし死なば、多くの果を結ぶべし、己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎むものは、之を保ちて永遠の生命に至るべし……」尙つゞいて教をのべてゐると。天から聲があつて、『われ既に榮光をあらはしたり、復さらに綱さん。』との聲に驚いて群衆は、雷霆が鳴つたのだと云ひ、天の御使が語つたのだと言ひ合つた。

こうしてキリストは死につくまで、たえざる教を宣べた。

『地に落ちたる麥キリスト。』は、至る所で、あらゆる時に教へを垂れた。恰で熟した果が落ちる如うに。泉の湧き出る如うに、全く自然に産みなされた。今、私達にまで傳へられてゐる他に尙多くの貴い言葉を見出すであらう。

キリストの存在全部は偉大な説教であつた。

□

キリストが此世に生れたことは、この地上の忘れてはならない。大きい奇跡と謂はなければならぬ。そして一生の間殆んど奇跡で通した。たゞ珍らしい事をして見せるとか、人を吃驚

させるとか云ふのでなしに、眞實の人の歩むべき道を、奇跡によつて導かれた。

奇跡そのものが完全な説教であつた。出来ない力をむりに出して説かうとした痕もなく、人も及ばない奇跡に銜ふ風なぞ毛頭もなく。しかし何の準備も、豫定もなく、時に従つて奇跡が、自然と生れた。そしてその奇跡は、その時神様から示されること全くを示し得て、のこさるゝものもなかつた。

キリストの奇跡そのものは、靜かな湖の上に投げた大波紋のやうに、又睡れる人達を喚び醒す地上の大鐘のやうでもあつた。神さながらの教はキリストの奇跡によつて全ふせられた。

キリストがガリラヤに入つて三日目に、そのカナと云ふ邑に婚禮があつた。母のマリヤと一緒に招かれてゐた。弟子たちもそのお祝ひにつらなつた。

その時お祝の葡萄酒がつかしたので、母のマリヤは氣にして、『葡萄酒がないよ。』など云つて、みな心配してゐると、キリストは集りゐる人達に、四、五斗入の石甕六つならべて、水を一バヤ潑して貰つた。すると直ぐ様キリストは『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆけ。』と命じた、い

つの間にかちやんと葡萄酒に變つてゐた。

饗宴長はそれを味つて、非常に不思議がり、「どこでも始めはい、葡萄酒を出す終りの頃は劣つたものになるのが普通なのに、どうして終りになるに従つて、善い葡萄酒を下さるのですか。」と云ひ合つた。

キリストはこうして、第一の神様のお力を示されたので、弟子たちはますますキリストを信じた。

その後逾越の節が近づいたから、エルサレムに上つた。宮に行つて見ると、お祭に献けものにする、牛、羊、鳩などを賣る店や、兩替する者が實に不愉快に、神様の宮をけがしてゐるの、繩を鞭に作つて、羊や牛を宮から逐ひ出した、兩替の金が散つたり、臺を倒したり大さはぎであつた。

この時キリストは、

「これらの物を北處より取り去れ、わが父の家を商賣の家とすな。」と酷く憤つた。

こゝに於てユダヤ人等は、キリストにより集つて、「貴方がこんな事をなさるからには、私達にも、こんな事をしてもらふといふ徴を見せて下さいませんか？」

キリストは直ぐ答へた。

「なんぢら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起さん。」

人達はこの言葉を考へるにつけて、ますます信じる様になつた。

ある時、キリスト、ヤコブとヨハネを伴つてシモン及びアンデレの家に行つた。シモンの外姑が熱病で臥したるので、人々がその事をキリストに告げた。キリストは近よつてその手をと

り、起し給ふた、すると熱はさつてすぐ起きる事が出来た。
やがて夕方になり日は全くくれた。夜になつても、多くの病人や、惡鬼につかれた者、みなキリストにつれて來た、そして町の人達も皆門に集つた。キリストはさまざまの病を一々いやして、多くの惡鬼を逐ひ出してやつた。

キリストが或町にゐた時、全身随切ひどくなつて癩病をわづらふ者があつた。キリストを見て平伏していふ事に、「先生、先生が神のみ心をおあらはしになるならば、私を潔くして下さいませう。」と。キリストはすぐに手をのべて彼につけて、「わが意なり、潔くなれ。」と言ひ給へば、直ぐ様癩病はいやされて仕舞つた。するとキリストは、之れを誰にもつけなげ様に命じて、言ふ事に、

「たゞ往きて己を祭司に見せ、モーセが命じたるごとく、汝の潔のために献物して、人々に證せよ。」けれどますますキリストの噂はひろまつて、多くの人達が群り集つた、あるひは教を聴かんとした。或は病氣をなほして貰ひたくて集つて來たが、キリストは獨り寂しき處に退いて祈り給ふた。

或日キリストが教を宣べてゐると、ガリラヤの村々や、ユダヤや、エルサレスから來たパリサイ人や、色々の學者など、そこに座つてゐた。外はと見るとまるで人山のやうでよりつく事も出來ない位であつた。

その時、中風を病んでゐる者を、床にのせて擔つて來たが、入る事が出來ない、しかしどうかしてキリストにお目にかゝりたいので、屋根に擔い上げて、瓦を取つて床のまゝ、多くの人にとり圍まれてゐる、キリストの前に縋りおろした。キリストはその病人に接し實に信仰の厚いのを知つて、

「人よ汝の罪ゆるされたり。」と云つた。するとこれを聞いてゐた群衆の中の、學者達やパリサイ人らは、心の中で、「どうしてあんな出すぎたことを言ふのだらう。神様より他に誰が罪を赦すことの出来るものがあるませう。」そんな事を考へ合つてゐると、早くもそれらの人の心の中を知つたキリストは、

「なにを心の中に論ずるか。『なんぢの罪ゆるされたり』と言ふと、『起きて歩め』と言ふと孰れが易き、人の子の地にて罪をゆるす權威ある事を、汝らに知らせん爲めに」と云ひながら、病人に向つて、

「なんぢに告ぐ、起きよ、床をとりて家に往け。」かれ立刻に人々の前で起きあがり、今まで永いこと臥てゐた床をとりあげ、神様に崇めの言葉を言つて、嬉びに勇んで家に歸つた。群衆は

それを見て酷く驚き、神様をあがめ、何かしらん懼ろしい氣持に導かれた。

或時カペナウンから二十五哩程はなれた、ナインといふ所に行つた。その日は弟子達は勿論多くの群衆もあとに従つた。町の門に近づくと、中から昇あがり出されて来る棺に出逢つた。まわり人がとりまいて、母とも思はる、寡婦やうぼが嘆き悲しんでゐた。聞けば獨息子が死んだのだといふ事であつた。

實に悲愴なものと感じたキリストは、すぐ近よつて酷く憫あはれ、泣くな。」と言ひながらひつ手てをおけば、昇あがいでゐた人は立ち止つた。

「若者よ、我なんぢに言ふ、起きよ。」

と、キリストの言葉に従つて、死人は起き上り物さへ言ひはじめた。そして之れを母に渡した。人々は皆懼れをいだいて、神様を崇あがめ、その事が附近の地に偏くひろまつた。

ある日キリスト、ガリラヤの海邊で教へを宣べた。その日の夕方「いざ彼方に往かん。」と言

つて舟に乗つた、弟子達も供に乗り、他の舟もあとに従つた。對岸むかひの東の海邊に、靜かなところを選んで、祈りをされるつもりでもあらう、

その時烈しい颶風こよが起つて、浪が入つて舟にいつばいになりそうで、今にも沈みそうになつた。キリストは艫かの方かたに茵しんを枕として寝てゐられたが、弟子達に呼び醒された。晝の働きて随分勞れてゐた。弟子達は、「先生、私達は死んではしまふかもしれませんが、おかまひ下さらぬですか。」と、キリストはやをら起き上つて、風をいましめ、海に言つた。「黙もせ、鎮しづめ。」

と、キリストが居すまゐるも正さない中に、風はすつかりおさまつて、すばらしい風となつた。靜かに弟子達に向つて言つた。

「なに故かく臆おそするか、信仰なきは何ぞ。」

と、弟子達は自分達のおちつきもなく、信仰のうすい事に自分ながら愛そうをつかし、つゝしみ深くせねばならぬ事を甚く懼れた。

キリストがガリラヤの西岸に歸つて來ると、多くの人がまち望んでゐた。實によるこんだ、

餓えるものが充たされた如うであつた。

その會堂の司ヤイロの娘が、今にも死にそうであつた。キリストが戻られた事を聞いて、足下に伏して切に願つて、『私の小さい娘がもう死にそうです、どうか御出で下さつて手をお、き下さい、そうすれば救はれますから、すぐ活きますから。』と云ふのであつた。

キリストは之を聞いて、會堂の司に、『懼るゝなた、信ぜよ、さらば娘は救はれん。』と云ひながら、ペテロ、ヨハネ、ヤコブの外は誰をも従へず、父母と一緒に家に入った。あたりの人は皆泣き、歎いてゐた。それらの人をもかへり見て、『泣くな。死にたるにあらず、寢ねたるなり。』と云つた。多くの人々は已に死んだことを知つてゐるので、キリストを嘲笑つた。併しキリストは娘の手をとつて、

『子よ、起きよ。』と言ひ給ふた。すると子の靈急ちかへつて、立刻に起き上つた。キリストすぐに食物を與へることを命じた。兩親の驚きは、見る目もはゞからず甚いものであつた。

ヤイロの娘の病氣に集つた群衆の中に、一人のあはれな女があつた。十二年の永い間血漏を

患ひ、どうしても治らないので閉口してゐた。多くの醫師にもき、めがなく、お金も随分費した。併し何の効もなく、それどころか反つて増々悪くなるばかりであつた。そこでキリストの事を聞いてゐたから、どうかお會ひしたく思つてゐた。しかし中々多くの人なので困つてしまつた。それでも衣の裾位には觸ることは出来やう、觸りでもすれば救はれるにきまつてゐると信じてゐたから、一生懸命に近よつて、そつとキリストの衣に觸つた。するとすぐ血はすつかり止り、きれいに乾いて、氣持まで實にハッキリして病氣の治つたことを感じた。此時キリストは自ら、能力が自分の軀から出たことを感じたまふて、群衆の中で振反つて言つた。

『誰が私の衣に觸りしぞ。』

弟子達はその事を知らないから、不思議がつて、『こんなに群衆がをしよせて、多くの人が押し迫つてゐるのに……衣に位觸つてゐる人がたくさんあるのに……どうして觸つた者は誰かなんておつしやるのですか。』と問へば、

キリストは答へて、

『われに觸りし者あり、能力の我より出でたるを知る。』と言つて、尙もその人を見出そうと見

廻した。

女は、これは隠れて居ることが出来ないと思つて、おそれ戦きながら御前に平伏し、あつた事どものこりなく告げた。

キリストは言つた。

「娘よ、なんぢの信仰なんぢを救へり、安らかに往け、病いえて健かになれ。」と、

ある時ユダヤ人の祭があつて、キリストは、エルサレムに上つた。

エルサレムの羊門のほとりに、ベテスダと云ふ池があつた。この池に添つて五つの廊があつて、その中に病人、盲人、瘦せ衰へた者ども夥多く臥てゐた。昔から、天の御使がをりをり下りて水を動す事があるので、動いたら最先に池に入れば、どんな病氣でも癒る、と、傳へられてゐた。それで多くの病人は皆水の動くのを待つてゐた。

その時三十八年病に苦しんでゐた人があつた。キリストが多くの病人の苦しんでゐるのを見ると、その中行分永いこと(三十八年)病んでゐる人を知つて、その人に言つた。

「なんぢ癒えんことを願ふか。」と、すると病人は答へた。「先生、水が動き出しても私は入れま

ぜん、皆われ先きに入つてしまつて、」

それを聞いたキリストは再び言つて、

「起よ、床を取りあけて歩め、」と。

すると、その人は忽ち癒つて、床をあけて歩んだ。丁度その日は安息日であつた。

又或時、或教會で説教をしてゐると、十八年間病につかれて、軀がかゝまり、ちつとも伸すことの出来ない女を見出した。キリストはそのをんなを見て言つた。

「なんぢは病より解かれたり。」と、そして女に手をおき給へば、立刻に軀をまつすぐにして歩くことが出来た。女はありがたく神様を崇めた。

キリストがある日途を往くと、生れながらの盲人に逢つた。生れながら盲人になることの哀れさを思つた弟子は、神様がどうしてそんな苦しみをお與へなさるのかと思つて、キリストに問ふた。

「先生、この人きり盲人に生れたのは、誰の罪ですか、己の罪ですか、又は親の罪ですか。」とキリストは答へて曰ふ事に、

「この人の罪にも親の罪にも非ず、たゞ彼の上に神の業の顯れん爲なり。我を遣し給ひし者の業を我ら晝の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能はず。「われ世に在る間は世の光なり。」かう云つて地に唾し、唾で泥をつくつて盲人の眼にぬつた。そして言ふ事に、

「ゆきてシロアムの池にて洗へ。」と、すぐ様行つて洗つた。すると歸りにはもう眼が開いて、自由に道を歩いて歸る事が出来た。

或日ベタニヤのマリヤとマルタから使が来て、「先生、ごらん下さい、貴方の愛し給ふた者が病んでゐます。」と言つてラザロの事を知らせて来た。

これを聞いたキリストは、「この病は死に至らず、神の榮光のため、神の子のこれに由りて榮光を受けんためなり。」と云つて、すぐ出かけもせず、二日の後、いよく出かけることにして、

弟子達にも、「われら復ユダヤに往くべし。」と仰しやつて、豫定を話した。すると弟子達の言ふ事に、「先生、この程もユダヤ人から石で撃たれそうになつたのに、復行くのですか。」と不思議がった。

併し自信をもつたキリストは、

「一日に十二時あるならずや、人もし晝歩かば、此世の光を見る故蹟くことなし。夜歩かば光その人になき故に蹟くなり。」更に言葉をついで、

「われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起さんに爲に征くなり。」と言つた。

弟子達は、「先生眠つてゐる人なら、ぢきに癒るでせう。」と云つて暗に行かなくても大丈夫だと云ふことをほめかしてゐた。

キリストはラザロは死んだ事を言つたつもりだけけれど、弟子達にはたゞ眠つたとしかとれなかつた。

そこでキリストはあきらかに言つた。

「ラザロは死にたり、我、かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめん

とてなり。然れば我ら今その許に往くべし。」

どうしてもキリストの心が動かないので、弟子の中でも、トマスなどは酷く悲しんで、「私達も往つて、彼等と共に死なう。」などと兄弟達とも話しながら、心配したが兎も角ベタニヤに立つた。

キリストがついた時はもうラザロが死んで四日目であつた。

ベタニヤはエルサレムから二十五丁ばかりの所だから、數多のユダヤ人が、マルタとマリヤ兄弟を慰めやうと來てゐた。

迎へに出たマルタがキリストにお逢ひすると、「先生、もし先生がいらつしやつたならば私達の兄弟は死にも仕なかつたでせうが。しかし、今でも、どんな事を神様にお願ひしても、きつとおかなへ下さると思つてゐますから。」と曰つて、キリストの來り給ふたことを甚どく力にしてゐた。

キリストは、

「なんぢの兄弟は甦るべし。」と言つた。

マルタはそれを聞いて、どうせぢきに甦ることは甦るにちがひないと、思つてゐたことを一増力強く感じ出した。

その時キリストは再び口を開いて、

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか。」

マルタは答へて、「先生、本當にそうで御座います。私は、貴方を此世にお降りになつた。神様のお子様、キリストだと信じてゐます。」と言つて、窃つと、姉妹のマリヤに、「先生が來ましてあなたを呼んでゐますから。」と言つてやつた。

之を聞いたマリヤは、急いでキリストの所に立つて來た。その時キリストは未だ村に入らな

いで、マルタと逢つた所にゐた。
家では、マリヤが急いで出かけて仕まつたので、きつと歎きのあまりお墓へでも行つたのだらうと、ユダヤ人なぞマリヤの後に従つた。

マリヤはキリストの許に來ると、足下にひれ伏して、「先生、もし此處にいらつしやつたなら

私達の兄弟は死には化なかつたのでせうに。」と言つて泣いた。あとから従つたユダヤ人も一緒に泣いた。

キリストは流石に涙をそ、られ、心を傷め悲しみの心に満ちて言ふ事に。

「かれを何處におきしか。」といふので、姉妹達は靜かに指し示して、「先生、ごらん下さい、」と言へば、キリストは涙をながし給ふた。

この時ユダヤ人も、「ごらん下さい、どんなにラザロを愛しましたか知れませんが。」

また或る者は、「盲人をお明けになつたこのお方が、どうしてラザロを死なせない様に出来なかつたでせう。」そんな事を言ひながら居並んだ。

キリストはまたも心を傷めつゝ、墓にいたり給ふた。墓は洞で石を置いて塞いであつた。

キリストはその前に立つて、

「石を除けよ。」と言つた。併し姉妹のマルタの言ふ事に、「先生、もう臭いでせう、四日も経つてゐますから。」と云ふは言つたが、皆で石を除けた。

キリストこの時目をあけて言ひ給ふ。

「父よ、我にき、給ひしを謝す。常にき、給ふを我は知る。然るに斯く言ふは、傍らに立つ群衆の爲めにして、汝の我を遣し給へしことを之に信ぜしめんとなり。」そう言つて今度は一段と聲を高めて。

「ラザロよ、出で來れ。」と呼はつた。

死にしもの、布で手足を巻かれたまゝ、出て來た。顔も手拭で包まれたそのまゝ。

キリスト之を見て、

「これを解きて往かしめよ。」と。

ラザロはかうして甦つた。

キリスト、或る時自分に従つて來た多くの群衆を見て、その淋しき人達をまるで牧ふ者のない羊の如くに甚く憫んで思ふだけ教を宣べた。

するともう時刻もおそかつたので、弟子達は氣にして、キリストの御許近くよつて、「こゝは不便な野原ですから、それに時刻も晩うございますから、人達を去らせて、あたりの村里で、

めい／＼何か食物を食べる様に致しましては……」と、言つた。併しキリストは、
「なんぢら食物を與へよ。」とばかり仰しやるので、「では私達往つて、二百デナリのパンを買つて、分けませうか。」と申し上げると、

キリストは、「パン幾つあるか、往きて見よ。」と、仰つたので見れば、パン五つと魚二つきりなかつた。弟子達は甚く氣にしてゐると、

キリストは、皆の人を組に分けて、百人の組、五十人の組と色々に分けて青草の上に座らせた。

かくてキリストは五つのパンと二つの魚をとつて、天を仰いで祝し、やがて弟子たちに仕して皆に配つた。二つの魚も一人一人に分けた。それから皆で喰べ始めた。随分たくさんの人であつたが、少しも足りなくなかつた。足りないどころが、返つて凡ての人が食ひ飽きて、餘りのパンと魚を集めたら、十二の筐かごに一杯いっぱいであつた。その時パンを食べたものは五千人であつたと傳へられてゐる。

パンの奇蹟のあつた直ぐの事、弟子達を強いて舟にのらせ、日暮方に對岸ひがしのベテサイダにつけ、皆を村に歸らせやうとしておいて、自分は祈らうと山に登つた。

間もなく風が逆た吹いて來て、舟はどうしても進まない。夜中になつても舟はやつと真中程にたゞよつてゐた。キリストはこちらの山にゐて、弟子達の漕ぎ煩ふを見て。夜明の四時頃、海の上を歩いてその舟のある邊まで行つた。そして往き過ぎやうとした時、弟子達が見つけてこれはテツキリ變化くわいはん者だと思つて騒ぎ出した。そこでキリストは近よつて、

「心安かれ、我なり懼るな。」と言つて舟に乗つた。不思議にもキリストが乗り移ると同時に、風はピツタリ止んで仕まつた。

ある時亦群衆の食ふ物がなかつたので、キリスト弟子達をよんで言つた。

「われ此群衆を憫む、既に三日われと偕ともにをりて食ふべきものなし。懼おそるしまゝにて、其の家に歸らしめば、途にて疲れ果てん。其の中には遠くより來れる者あり。」弟子達これを聞いて、
「この不便なそして、寂しい地では何處からパンを買つて、このたくさんの人に喰べさせや

う。』と氣にした。

併しキリストは弟子に、『パン幾つあるか。』と言ふので、『七つ』と答へた。

キリスト群衆を地上に坐らせ、そして七つのパンを取り上げ、謝して之を裂き、弟子たちに與へて群衆に配らせた。それから小い魚も少し許りあつたので、祝して、之をもパンの様にした。そして皆で喰べた、随分たべたのでその喰べ飽きたものを拾つたところが、七つの籃に一ばいであつた。それから喰べた人を數へて見たら凡そ四千人程あつた。

或人キリストの許にきて跪いて言つた。『先生、私の子を憫んで下さい。癲癇で酷く難み、ある時は火の中に、ある時は水の中に倒れるのです、それでこの子を御弟子たちに連れて來ましたが、醫すことが出来ませんでした。』

この事を聞いてゐたキリストは、信仰のうすい當時の人心をかこたれて、『その子を我に連れ來れ。』と言つた。

やがてその子どもを連れて來た。子供がキリストを見ると、直ちに痙攣けて、地に倒れ轉び

廻つて目も當てられなかつた。

キリスト父に問ふて、『いつの頃より斯くなりしか。』父は答へて、『幼き時からでした。それで時々發作して、死にそうになつた事が何度もあつたんです。若し貴方のに出來ましたら、私達を憫んでお助け下さい。』

この言葉が異様にひいたので、キリストは、『爲し得ばと言ふか、信する者には、凡ての事なし得らるるなり。』

その時父直ちに叫んで、『われ信す、信仰なき我を加へ給へ。』と言つた。

その時群衆は走り集つた。キリストは穢れた靈を禁めて言ひたまふた。

『啞にて耳聾なる靈よ、我なんぢに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな。』

この言葉に従つて、靈さけんで甚く小供を痙攣けさせて出て行つた。暫くの間子供は死人のやうであつたので、多くの人達は、これは死んだのだと云つた。

併しキリストがその手を執つて起した。子供は聲に應じて立つた。

家に歸つてから窺かに、『わたし達には、どうして逐ひ出す事が出来なかつたでせう。』と弟

子達がきいたので、キリストが彼等に言ふ事に、

「なんぢら信仰うすき故なり。誠に汝らにつぐ、もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に「此處より彼處に移れ」と言ふとも移らん、斯て汝ら能はぬこと無かるべし。」と。

キリストが、エルサレムに往かうとして、サマリヤとガリラヤとの間を通つた。そして或村に入つた時、十人の癩病人に逢つた、癩病人は遙か先に立ち止り、聲をあけて、「貴方、キリストよ、私達を憫れんで下さい。」と曰ふと、キリスト之を見て、

「なんぢら往きて身を、祭司らに見せよ。」と、曰はれたので直ぐ様出かけた。

彼らは行きつかない中に潔められて仕まつた。その中の一人、自分が醫されたのを感じて、大聲に神様を崇めながら歸つて來た。キリストの足下にひれ伏して謝した。これはサマリヤの人であつた。

そしてキリストが言ふことに、「十人みな潔められしならずや、九人は何處に在るか、この他國人の外は、神に榮光を歸せんとて歸り來るものなきか。」と、

そして續けて言つた。

「起つて往け、なんぢの信仰なんぢを救へり。」

ある時キリスト、弟子達と多くの群衆と一緒に、エリコを出られた時、テマイの子の、バルテマイと云ふ盲目の乞食が、路傍に坐つてゐたが、ナザレのキリストである事がわかると、急に叫び出して、「ダビデの子イエスよ我を憫みたまへ。」と云つた。

キリスト立ち止つて、「かれを呼べ。」と云ふので、人々が盲目を呼んで言ふ事に、「安心してお出でなさい、早くお起ちなさい、呼んでいらつしやる。」

この言葉を聞いた盲目は、上衣を脱ぎ捨て、躍り上つてキリストの許に來た、すると、キリストは、

「われ汝に何を爲さんことを望むか。」と言つた。盲目は、「先生、私はお目にかゝりたいのです。」と、

この時キリスト彼に、

「のけ、汝の信仰なんぢを救へり。」

と、言ふと、直ちに見る事が出来た。そしてキリストに従つた。

キリストは斯うして多くの奇蹟を行つた。そして奇蹟を行ふ度に、世の誤解を受け、受難へと導かれた。併し神様のみ心をいよいよ地上にハッキリさせた。

キリストが生れた時は、ユダヤは、ローマの皇帝からヘロデ王といふをつかはして治めてゐた。

キリストが生れると間もなく、東の方の博士達が、エルサレムに尋ね入つて言ふ事に、「ユダヤ人の王として生れた者は何處にゐますか？ 私達は東の方で星を見てその事を知つたから、尋ねて拜まうと思つて。」と、

ヘロデ王はこのことも聞いて酷く悩んだ。そこで、王や民の祭司長や學者を皆集めて、一體キリストは何處に生れたのか。と、問ひ質した。彼等の言ふことに、それはテツキリユダヤのベツレヘムだ。預言者も、

「ユダヤの地ベツレヘムよ、汝はユダヤの長等の中にて最小さき者にあらず、汝の中より一人の君いで、わが民イスラエルを牧せん。」

と、曰つたので、ベツレヘムにきまつてゐると云ひ合つた。

ヘロデ博士達と相談して、星のあらはれた時を調べたりした、博士達は、「往つて幼児の事を細かにたづね、見つけ出したら知らせしてくれ。我も行つて拜まう。」との命を受けて、ベツレヘムに向つた。

博士達が出かけると、前に見た星が、飛んで、まるで案内でもするやうに幼児のゐる上に止つた。彼等は歡喜に溢れて、キリストを拜み、寶の匣をあけて、黄金や乳香や没藥などの禮物を獻けた。

斯うしてゐる時に、「歸りはヘロデ王のもとへ歸るな。」とお告が夢に現れたので博士達は、ほかの路から自分の國へ歸つて了つた。

博士達が歸つたのち、神の使が現れて、ヨセフは夢を見た。「起きて幼児とその母とを携へ、エジプトに逃れ、わが告ぐるまで後處に留れ。ヘロデ幼兒を求めて亡さんとするなり。」ヨセフ

はすぐ起きて、夜の間に幼児と母とを連れて、エジプトにのがれた。そしてヘロデの死ぬまでエジプトに留り居た。

預言者が『我エジプトより我が子を呼び出せり。』と言つた言葉にかなつてゐる。

ヘロデは随分待つたが博士達が歸つてこないで、甚く憤つて仕まつた。とう／＼人を遣して、ベテレヘムやその地方の二歳以下の男の兒を全部殺して仕まつた。

斯うしてキリストは、生れながらに迫害を受けてゐた。一方から見ればキリストの一生は迫害の記録でもあつた。

ヘロデは殺しお、せたとばかり思つてゐたのに實はエジプトに立派に生長してゐた。ヨセフはヘロデの死んだ事を夢みて、神の使の言葉をきいた。『起きて幼児とその母とを携へ、イスラエルの地にゆけ。幼児の生命を索めし者どもは死にたり。』ヨセフは直ちに起きて再びイスラエルの地に歸つたが、アケラオといふ王が、父ヘロデに代つて、ユダヤを治めると聞いて、入る事を恐れ、思案にくれてゐると三度夢にて現れ、御告を蒙り、ガリラヤの地方に退き、ナザレに往つて住んだ。

ある時キリストが、故郷のナザレに行つて、安息日に教會で色々な事を宣べ傳へた。すると村人は、自分達の信仰の心のうすい事を言はれたり、キリスト自身で神の子だといふ事が、氣に入らないので、會堂にゐる者皆で、キリストを町から逐ひ出して、町はづれの山の崖に引つ張つて往つて、投げ落そうとした。併しキリストは、その人々の中をぬけて、何處へか去つて仕まつた。

キリストかがリラヤに教を宣べ傳へた頃、ある時、手のなえたる人に伸してやつた。この事を知つた。パリサイ人とヘロデ黨の人と共に、如何にかしてキリストを亡さうと謀つた。

又、ベリヤに教を傳へた時も、キリストがガリラヤの海の波を淨めてからの事、二人の悪鬼につかれた者から逐ひ出した時、その悪鬼が豚の中に入つて皆崖から海に落ち込んで溺れてしまつた。

この時も、豚飼ひは走つて町へ行つて、その事を話した。すると町の人達皆一緒に出て來た。キリストに逢つて云ふ事に、『どうかこの地力をお去り下さい。』と、やがてキリストは舟に乗つ

てガリラヤに歸つた。

また、キリストが、ベテスダの池に、三十八年間病に苦しんだ人を癒やした時も、その日は安息日に當つたので、ユダヤ人が、醫された人にいつて、『今日は安息日だ、安息日に床をとるはよくない。』するとすぐ様答へて、『私を治したんが、「床をとり上げて歩め」とおつしやつたから……。』ユダヤ人は重ねて、『誰が「取り上げて歩め」なんて言つたのか。』と、問ひつめられたが醫された人は、誰れが醫して呉れたのかちつとも知らないで、黙つてゐた。その後キリストが宮で、前に治してやつた病人に會つた。そして言つた。『視よ、なんぢ癒えたり、再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起らん。』と。彼は、自分を醫して呉れたものがわかつたので、ユダヤ人にその事を告げた。

ユダヤ人だすぐにキリストをせめて、安息日にそんなことをした事と問ふた。するとキリストは、『わが父は今に至るまで働き給ふ。我も亦働くなり。』と答へて、さも自信ありけなので、ユダヤ人はいよく殺さうと思ひ込んだ。

それに、安息日を守らないばかりでなく、神様を我が父といつて、自分を神様と同じやうに言ふので、ユダヤ人はいよく憤つたのだ。

或る時は、頑迷な學者とパリサイの人が……。キリストが自分を神の子と信じ、人々の罪なども赦し、病氣をなほしたり實に不思議な色々な事をするので……。折もあつたら訴へて殺そうとすきをねらつてゐた。その時弟子達が、パリサイの人やユダヤの人達の昔からの習慣で、食事の時に手を洗ふことになつてゐるのを、全く無視して手も洗はず、食器などもそのまゝ使つたりして、法則を少しも守らなかつたので、甚く憤つてキリストに向ひたゞした事があつた。

ある時は、キリストを鬼につかれたものだと言つた。キリストを本當に知らない、學者もパリサイの人は、神の子だと云ふ事をひどく憤つて、石で撃ち殺そうとした。併しいつの間にか宮を出てしまわれた。

ラザロを甦らせた折の事。まのあたり見た多くのユダヤ人は、全くキリストを信じて仕まつたが、中にパリサイ人に往つてキリストのした事をつけた者があつた。

そこで祭司長とパリサイ人等は相談して、「私達はどうしませう。キリストはたくさんの不思議な事をしますが……。若しこのまゝ捨て、おけば、人々が皆信するやうになるし、そうすれば、彼等の仲間が入り込んで来て、私達の國と土地とを奪つて仕まひませう。」と、そんな事を言ひ合つて、此日からキリストを殺そうと謀つた。

キリストが安息日に或る會堂で、十八年の永い間病につかれた女を醫した時も、その會堂の司が、安息日に醫した事も憤ほつて、群衆に對つて言つた。「働くべき日は六日あります。その間に來て治して貰ひなさい。安息日には仕ない方がい、から。」これを聞いたキリストは、「偽善者らよ、汝等おのおの安息日には、己が牛又は驢馬を小屋より解きいだし、水飼はんとて牽き行かぬか。さらば長き十八年の間サタンに縛られたるアブラハムの娘なる此の女は、安息日にその繫より解かるべきならずや。」

と、この言葉を聞いた者ども、みな恥ぢて、逆つた人達は黙つて仕まつた。そして多くの人々はその榮光ある凡ての業をよろこび合つた。

キリストは多くの斯うした迫害に耐へ忍びながら、地上に福音を宣べ傳へた。席の暖るひまもなく、短かき傳道の年月をおくつた。

或時キリストが途を往くと、キリストにつき従つた者が、「私は何處まで、もお従ひ申して往きませう」と言つた。キリストはすぐ答へて、

「狐は穴あり、空の鳥は罅あり、されど人の子は枕する所なし。」と言はれた。實にキリストはそれらの生きものにもまして苦しみを積まれた。それから多くの人が色々のことを言つてつき従つた。その度に教への言葉を下さつた。その中に、「先生、私は先生にお導きを願いたいんですが、併し家の者にお別れをして來ますから、それだけはお許し下さい」と言つた者があつた。するとキリストはすぐ言つた。

「手を劬につけてのち、後を顧みる者は、神の國に適ふ者にあらず。」と。

迫害に克ちつゝ、傳道を續けたキリストは、早くも受難を豫知してゐた。

キリストがある時靜かに祈つて、弟子達と語り合つた。その時キリストが問ふ事に、「人々は我を誰と言ふか」と、弟子の一人が、「バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者の一人」だと言つてゐますと答へた。それでは、「なんぢらは我を誰と言ふか」ペテロが答へて、「貴方は神様の子キリストです」と。

するとキリストは、自分の事を誰れにも話さないやうに戒められた。

そして、人間はきつと多くの苦難を受けたり、長老や、祭司の長や、學者等に棄てられて、その上殺されるであらう。併し三日の後にはきつと甦る事を教へはじめ、この事についてハッキリ話された。やがて來るべき受難の豫感を、

キリストが弟子とガリラヤに集ひるた時、突然言つた。「人の子は人の手に付され、人々は之を殺さん、斯て三日めに甦るべし」と、併し弟子達にはハッキリわからなかつたが、何か知らん恐ろしさを豫感して甚く悲しんだ。

キリストが弟子達とエルサレムに上る途で、十二人の弟子をそば近くよんで、自分の身にこの先起らうとする事を語り出した。そしてある懼ろしい空気をたゞよわして言つた。

「視よ、我らエルサレムに上る。人の子は祭司長學者等に付されん。彼ら死に定めて、異邦人に付さん。異邦人は嘲弄し、唾し、鞭ち、遂に殺さん、斯くて彼は三日の後に甦へるべし」と。

□

キリストが、ある豫感に動かされて、弟子達と、今迄出來るだけ黙つてゐたある感じを、話して後數日目のこと。ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人きりつれて、人を避けて高い山に登つた。すると、實に不思議にも、ある瞬間から、あたりの空氣が何か知らんある崇高な感じにたゞよつて、キリストの姿が全く變つてしまつた。衣はかゞやき出して、たゞ眞白く見えた。どんなに人間が苦しんでも出來得ない白さを現し、恰で純白の精そのものでもある如うに。總てのものをも晒し、おゝせなければ止まぬ程でもあつた。此世に清淨といふものがあるならば、この時の衣をおいて外にはないであらう。

弟子達はまともに見向きも出來ず、みまもりもしなかつたが、その時、エリヤ、モーセもと

もにゐて、キリストと何かを語り合つた。ペテロは何かしらん、身さいふるえて、何を言つていゝか、おすくしながら差し出て云ふ事に、「先生、我達はこのまゝここに居たう御座います。もしお許し下さるなら、私達に三つの廬を造らせて下さい。一つは先生に、一つはモーセのために、一つはエリヤに住んで頂かれる如うに。」するとまもなく、雲が起つて、覆はれてしまつた。そして雲の中から聲が聞えた。「これは我が愛しむ子なり、汝ら之に聽け」弟子達はある崇高な感じがうすらいだあとで見回すと、キリストと自分達の外にははや誰も見得なかつた。弟子達は實に貴い氣持を大切にしながら山をくだつた。

降り始めてキリストが彼らに、人の子が一度死んで、死から甦らないうちは、見た事を誰にも語るな……。といふ意味のことを戒めなされた。

弟子達は黙つて伺つてゐるが、「死から甦る」と言ふことは、如何ういふ事かと、互に論じ合つた。

それから弟子達が、
「そんなら、エリヤ先づ来るべし。と、學者達が言ふのはどういふわけですか」と聞いた。

「實にエリヤ來りて萬の事をあらためん。我なんぢらに告ぐ、エリヤは既に來れり。然れど人々これを知らず、反つて心のまゝに待へり。斯のごとく人の子もまた人々より苦しめらるべし」と、キリストの言はれたのをきいて、弟子達はこれはバプテスマのヨハネを指して言はれたのだとばかり悟つた。

キリストはこの時から、主として弟子のみに語つた。色々な事を豫感したキリストは、自分の爲すべき事を果して、徐に死の陰、暗黒の谷に進んだのである。



過越の祭の二日前となつた。

キリストは今迄宣べ傳へてゐた言葉を斷つて、弟子達に對つた。そしてもうすぐ事の起るを知つてゐるが、實に靜かに。

「なんぢらの知るごとく、二日の後は、過越の祭なり、人の子は十字架につけられん爲に賣らるべし」と言つた、併し弟子達にはハッキリわからなかつた。

この時祭司の長や民の長老らが、カヤバといふ大祭司の中庭に集つて、詭計をめぐらして、

キリストを捕へ、かつ殺さんと相謀つた。併し「祭の間はよしませう、きつと民の中に大亂が起るかも知れない」と言つて、キリストを捕へる方法をめぐらした。

すると十二人の弟子の一人、イスカリオテのユダは色々の氣持から、祭司長らの許に行つて「キリストを君達に付せばどの位私にくれますか」ときいた。彼等はそんならこれを差し上げますと云つて、銀三十を送つた。遂に迷つたユダはどうも銀三十の代りに、キリストをわたす事に約束を結んでしまつた。そして機會をうかつた。

72

斯うしてキリストは、己に敵の手に渡らねばならぬばかりになつてゐるのに、弟子達はまだ何も感じなかつた。

いよいよ水曜とはなつた。明日は逾越の始めの日だといふので、弟子達は準備にかゝつた。キリストの許に行つて、「逾越の食をするのどこがお望みですか」と問ふた。

するとキリストは、二人の弟子を遣して言ふことに、「都に行け、然らば水をいれたる瓶を持

つ人、なんぢらに逢ふべし。之に従ひ行き、その入る所の家主に「師いふ、われ弟子等とともに、逾越の食をなすべき座敷は何處なるか」と言へ。然らば調べ備へたる大なる二階座敷を見すべし。其處にわれらの爲めに備へよ」そこで、弟子達は都へ行つた。キリストに言はれた通りの事があつたので、その通り逾越の準備はすつかりなつた。

日も暮れに近い頃。キリストは残りの弟子と共に、都エルサレムに入つて、準備の席につかれた。

キリストが席につくと間もなく、立ち上つて上衣をぬいだり、手巾をどつて腰にまどつたりして、盥に水を入れた。やがて、弟子達の足を次から次と洗つて、手巾で拭つた。番が移つてシモン、ペテロの所にくると。とてもたまり兼ねてペテロは、「先生、私の足もお洗ひ下さいますか」と言ふと、

キリストは、

「わがなす事を汝いまは知らず、後に悟るべし」と、之れを聞いてはるたが、ペテロはとてもたまらないので、「先生、永遠に私の足は洗はないで下さい」と言つた。すると、キリストは直

73

ぐ様「われ若し汝を洗はずば、汝われと關係なし」と言ふので、そんならと思つて、「先生、私の足ばかりでなく、手も、頭も洗つて下さい」とヘンに勝手なことを言つた。

キリストは、

「すでに浴したる者は足のほか洗ふを要せず、全身清くなり、斯く汝らは潔し。されど悉くは然らず」と言つた。

キリストは自身を賣る人を知つてゐたからそんな言葉をつけたのだ。

それから一同席について居すまいを正すと、キリストは口を開いて、

「まことに汝らに告ぐ、我と共に食する汝らの中の一人、われを賣らん」と、突然言はれたので、弟子達はギツクリして、一人一人に、「われなるか」「われなるか」と言ひ出した。

キリスト再び口を開いて、

「十二人のうちの一人にて、我と共にパンを鉢に浸す者は夫なり。實に人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。然れど人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを」と、

それからキリストは、パンを取つて、祝してさき、それを弟子達に與へて言ふことに、

「取れ、これは我が體なり」と、今度は酒杯を取つて謝して彼等に與へた。彼等は皆その酒杯を飲んだ。そしてキリストは、

「これは契約の我が血、おほくの人の爲めに流す所のものなり。誠に汝らに告ぐ、神の國にて新しきものを飲む日まで、われ葡萄の果より成るものを飲まじ」

死も近づいたキリストは、斯うして愛する弟子達と最後の晚餐をした、めた。

それからキリストは多くの教へをのべた。

「今や人の子榮光を受く、神も彼によつて榮光をうけ給ふ」

「若子よ我なほ暫く汝らと偕にあり、汝らは我を尋ねん。然れど曾て、ユダヤ人に「なんぢらは我が往く所に來ること能はず」と、言ひしごとく、今、汝らにも然か言ふなり」

「われ新しき誠命を汝らに與ふ、なんぢら相愛すべし。わが汝等を愛せし如く、汝等も相愛すべし。互に相愛する事をせば、之によりて人みな汝らの、我が弟子たるを知らん」

聞いてゐた弟子達の中、シモンペテロが、「先生、何處へゆき給ふか」と問へば、キリストは

「わが往く所に、なんぢ今は従ふこと能はず。されど後に従はん」するとペテロは問ひ返して
「先生、今従ふことの能きないのは何故ですか、私は貴方のためには生命も棄てるつもりなん
ですのに」キリスト之れを聞いて、

「なんぢ我がために生命をすつるか、試にまことに汝に告ぐ、なんぢ三度われを否むまでは、
鶏鳴かざるべし」と言はれた。

尙キリストは、多くの説教をした。最後の教へであつた。

「なんぢら心を騒すな、神を信じ、また我を信ぜよ。わが父の家には住處おほし、然らずば我
かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために處を備へ往く、もし往きて汝らの爲めに處を備
へば、復きたりて汝らをわがもとに迎へん。わが居る所に汝らも居らん爲なり。汝らは我が往
く所に至る道を知る」

するとトマスが、「先生はどこへいらつしやるのか知りません、ましてその道などはちつとも
わかりませんが」と言ふと、キリストは、

「われは道なり、眞理なり、生命なり、我に由らでは、誰にても父の御許にいたるものなし。

汝等もし我を知りたらば、我父をも知りしならん。今より汝ら之れを知る。既に之を見たり」
とハツキリ答へ給ふた。

またピリポの問に答へられて、

「我を信するものは我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けば
なり。汝らが我が名によりて願ふことは、我みな之をなさん、父、子によりて榮光を受け給は
ん爲めなり。何事にて我が名によりて我に願はば、我これをなすべし。汝等若し我を愛せば、
我が誠命を守らん。われ父に請はん、父は他に助主をあたへて、永遠に汝らと偕に居らしめ給
ふべし。これは眞理の御靈なり、世はこれを受くる事能はず、これを見ず、また知らぬに困る。
汝らは之れを知る。彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給ふべければなり。我なんぢらを
遣して、孤兒とはせず、汝らに來るなり」と、

また、

「我は葡萄の樹、なんぢらは枝なり。人もし我にをり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべ
し」

「汝らは泣き悲しみ、世は喜ばん。汝ら憂ふべし然れどその憂は喜びとならん」
キリストは、これらの事を語りはて、告別の祈禱に時を過した。頭ば天を仰ぎ、眼は異様に光つてゐた。

□

最後の晩餐の後、キリスト達は讚美歌をうたつて、オリブ山に出て行つた。

その時キリストが、「なんぢら皆贖かん」と言ふとペテロはすぐ答へて。「假令みな贖いても、私丈は決して贖きません」と言つた。然してキリストは又言つて、

「まことに汝らにつぐ、今日この夜、鶏ふたたび鳴く前に、なんぢ三度び我を否むべし」
するとペテロは力一杯に、「私は貴方と一緒に死ぬ事はあつても、決して、さける如うな事はしません」と、これを聞いた弟子達も皆同じ言葉をくりかへした。

ゲツセマネにつくと、キリストは弟子に、

「わが祈る間に、ここに座せよ」と言つて、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴つて、園に入つた。

甚く驚き、かなしみ、三人に向ひ、

「わが心いたく憂ひて死ぬるばかりなり、汝ら此處に留りて目を覺しをれ」と、
そして少し離れた所へ行つて、地に平伏して祈つた。若し出来るものなら、こゝうした場合を早く過ぎ去らせて仕まひたいと思ふ心で一杯であつた。

「アバ父よ、父には能はぬ事なし、此酒杯を我より取り去り給へ。されど我が心のまゝを成さんとに非ず、御意のまゝを成し給へ」

尙キリストは祈りつゞけた。そしてありし事どもを思ひめぐらして、深い悲み、深い憂ひに導かれた。シト／＼とにじんだ汗は恰で血でも滴るやうに、土の上に落ちた。

ひそかに伺つた弟子達もある懼ろしき空氣に製はれて、等しく憂ひに沈んだ。

祈りに祈つたキリストは、立ち上つて弟子達を見た、ところが弟子達はそれとは知らずまどろんでゐた。ペテロに對ひ、

「シモンよ、なんぢ眠るか、一時も眼をさまし居ることは能はぬか。なんぢら誘惑に陥らぬやう目を覺し、かつ祈れ。實に心は熱すれども肉體よわきなり」と言つた。

再び離れて、同じ言葉で祈りつづけた。

又立つて見れば、彼等は眠つてゐた。彼等はすっかり疲れて、キリストに答へる言葉さえ出なかつた。

キリストは三度離れて祈り、祈り全く果て、弟子達のそば近く来て、「今は眠りて休め、足れり、時来たれり、視よ、人の子は罪人らの手に付さるなり。起て、われら往く可し。視よ、我を賣るものちかづけり」と、

直ぐこの先き懼ろしき時の來ることを知つたキリストは、おさへつけ様もない氣持を感じたが、やがて祈つて、靜かに神の導きを待つた。

この静けさこそ、實に偉大な靜寂であらう。

□

ゲツセマネに祈つたキリストが、尙語つてゐると、十二人の弟子の一人のユダが近づいて來た。そのまわりには、祭司の長や、學者長老等から遣はされた群衆が、手に手に劍や棒を持つて來た。そのものくしさと云つたらなかつた。

彼等は豫じめ合圖をしておいたので、ユダが接吻する人を探へさえすればキリストに違ひない事を心得てゐた。

かくてユダが御許近く行き、「ラビ」と言つて接吻した。するとキリストが「友よ何とて來る」と言つたが、それと見たものどもは、直ちに手をかけてキリストを捕へた。

これを見たペテロ、後で反射的に一人の捕吏をつかまへ、その耳を切り落して仕まつた。

その時キリストは自分の身に降りかゝつてゐる大きなものもよそに、ペテロに對ひ、

『なんぢの劍をもとに收めよ、すべて劍をとるものは、劍にて亡ぶるなり。』と言はれた。そしてキリストは人々に對つて、

『なんぢら強盜にむかふ如く劍と棒とを持ち、我を捕へんとて出で來るか。我は日々なんぢらと偕に宮にあつて教へたりしに、我を執へざりき、然れど是は聖書の言の成就せん爲なり』と。

此時弟子達は一人去り二人去り、みなキリストを棄て、逃げ去つた。

ある若者が、素肌に亞麻布を纏つて、キリストに従つたが、捕手に捕へられた。すると亞麻布を棄て、裸で逃げ去つた。

群衆は、キリストを取り囲み揺々と（橄欖山）オリブ山を下り、エルサレムに引き上げた。これぞ人の子の罪人の手に付された日であつた。

□

捕手はキリストを祭司の長カヤバの邸につれて行つた。大祭司、長老、學者ら皆集つてゐた。どうかしてキリストの死を定めやうと色々な證據を申し立てた。

過越の祝にエルサレムに上つた時に「われは手にて造りたる此宮を毀ち、手にて造らぬ他の宮を三日にて建つ可し」と言つたとか。

色々のことを言つて罪を定めやうとした、しかし總ては無駄であつた。そこで仕方がないから大祭司は、「なんぢは頌むべきもの、子キリストなるか」と問ふので、キリストは實に落ち付いて、

「われはそれなり、汝ら人の子の、全能者の右に座し、天の雲の中にありて來るを見ん」と言つた。よどまず言つたこの言葉に、彼等はすつかり腹を立て、これは神を瀆したものだといふので、死に當る可きことを主張し出した、そしてキリストの顔を蔽ひ、拳を振つたり、手掌を

あけたり、書くにさえいやらしい振舞をして、キリストを苦しめた。

併しキリストは少しのあはてる色もなく、非常な努力で耐へ忍んだ痕もなく、實に自然に、晴ればれとして、裁判の間にも個人的の憤怒なども更になく、實に超然として俗界の情を離れたおもゝち。しかも少しも不自然の色もなかつた。

ペテロは一度は逃げ散じたものゝ、氣になるので、遠く離れてキリストに従ひ、大祭司の庭まで入つた、そして下役どもと一緒に座つて火に暖まつてゐた。

その時大祭司の婢女の一人が來て、ペテロを視て、「貴方もキリストと一緒においでせう」と言つた、ペテロはあはて、「知らず」と言つたが不安なので、庭口に出ると再び、「この人はあの仲間」だと云つた、やつぱり「知らず」と言つたが、間もなく、傍に立つてゐた人が、「貴方はガリラヤ人でせう、慥に黨與でせう」と言はれた。やつぱりペテロは「知らず」と答へた、その時二度目の鶏が鳴いた。

ペテロ、「鶏二度なく前に、なんぢ三度我を否まん」と言はれたキリストの言葉を思ひ出して、たまたまなく心を責められた、急いで門の外に出て、思ひ反しては泣いた。

夜が明けるとキリストは群衆に供なはれて、ユダヤの總督ポンテオ・ピラトの前に曳き出された。

「此人は我等の民を惑したり、貢をカイザルに納めることを禁じたり、自分から王だと言つてゐるのです」としきりに訴へた。

ピラトはこの訴へは別に聞きもしなかつたが、「貴方はユダヤ人の王ですか」と問ふた。その時キリストは「なんぢの言ふが如し」と答へたきり、群衆が何を言つてもそれに應じて少しも口を開かなかつた。

過越の祭りには、總督や群衆の望にまかせて囚人一人を赦す例あがつた。ピラトはキリストに何の罪もない事を知つてゐたから、それに祭司の長等がキリストを嫉んで罪に落そうとする事を見抜いてゐたから、祭りに際してキリストを赦さんことを願つた。

ピラトがそんな事を言つてゐると、彼の妻が人を遣して「かの正しい人に係るやうな事は爲さらない方がいゝでせう、私はゆうべその事について、まざく／＼苦しい夢を見ましたから」

と言つて来た。

兎も角ピラトはキリストを赦さうと考へたのに、群衆は、この人は、ガリラヤから始めて、全國を巡つて民を惑はしたり、その上神の名をけがした罪は随分重いので、十字架につけなければならぬと、實にもものしい氣はいであつた。

ピラトは、キリストがガリラヤ人であるといふので、此時丁度エルサレムにゐたヘロデ王のもとに送つた。

ヘロデはキリストを見てよろこび、色々の事を問ふた、併しキリストは何も言はなかつた。

ヘロデは久しい前から、キリストに逢つて、何か聞いたり、何かの徴を見やうと思つてゐたからであつた。

再びピラトにわたされて、いよいよ最後の時が来た。

□

此時キリストを賣つたユダは、目の前に死を定められたキリストを見て、酷く悔いて、自分の仕た事の懼しさにふるへた。直ぐ祭司の長、長老等の所へ走つて行つて、かの三十の銀をか

へして言つた、「私は罪のない血を賣つて、罪を犯した」と。併し彼等は、「我ら何にも干りません、汝自ら當るがよい」と、實に平氣なものであつた、勝手にするがい、と云ふのだ。ユダはたまらなくなつて、其銀を宮に投げ捨て、去つた。そして首を縊つて自殺して仕まつた。此の人にも眞心が通つたであらう。

祭司の長らは、その銀を拾つて、これは血の價だから宮の庫には納めない方がよからうと言つて、議つてある畑を買ひ、旅人らの墓地とした。その畑は今でも血の畑と稱へられてゐる。

□

キリストは殺氣に満ちた兵卒どもに導かれて官邸の中庭につれて行かれた、そして紫色の衣を着せられ、茨で編んだ冠冕を冠せられて、「ユダヤ人の王、安かれ」と嘲弄されたり、葦で首をたゞいたり、又は葦をキリストに持せだりして、その前に跪いて禮拜したり、實に口にするさへ酷い侮蔑を與へた。

酷い侮蔑の後、紫の衣を剥いで、故の衣を着せ十字架につけやうと供なひ出た。その時クレネ人のシモンといふ人が、ゆくりなくも通りかゝつたので、その人に十字架を負はせ、キリス

トをキヤルバリーの丘に導いた。

キヤルバリーを、ゴルゴタ又はグルゴレスとも曰つて、髑髏といふ意味の處だといふ。多くの群衆と、歎き悲む女たちの群と之に従つた、キリストは振反つて女達に言つた。

「エルサレムの娘よ、わが爲に泣くな、たゞ己がため、己が子のために泣け……」と、他に二人の悪人も、死罪に行はれるので共に曳ひて行かれた。

三本の十字架は、キヤルバリーの丘の空高く聳えて天と地との間に立てられた。其中央のものがキリストに備へられた。

キリストは靜かにしかし力ある言葉で、
「父よ、彼等を赦し給へ。その爲すところを知らざればなり」と、

その間に兵卒共は、死後のキリストの衣を分けて、鬪取りに仕やうとしてゐた。

やがてピラトは、「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と罪標を書いて十字架の上に掲げ、地上の救主キリストは、罪人によつて、十字架に上げられた。

その時キリストは、左右の人の死につくを見て、祈つて。

「主よ、汝其國に來らんとし我を憶ひ給へ」

次に、

「汝今日我と偕にバラダイスに在るべし」と。

晝の十二時に、地上は編く暗くなつて、三時まで續いた。

キリストは十字架の傍にマリヤを立つてゐるのを見て母に向つて言つた。

「掛んなよ、視よ、なんぢの子なり」

また弟子に向ひ、

「視よ汝の母なり」と。

併して、キリストは、今迄心をめぐらした、多くの地上の人のうへからだん／＼自分にかへ

つて、心は神に對つた。

その時天地は暗愴として、重くろしく覆はれた中に、靜かに黙つてゐたが、終に口を開いて、

「我が神、我が神、何ぞ我を棄て給ひしや」

と、人類の罪深き暗黒の中に、光を見出だそうとしたのである。

キリストは總てが終つた事を知つて、

「われ渴く」と謂はれた。

その時酸い葡萄酒を海綿に浸して、キリストの口に差しつけた。

キリストはその葡萄酒の汁をうけて

「事畢りぬ」と云ひ給ふた。

やがてキリストは七度口を開いて、

「父よ我が靈を汝の手に託せ」と。

これが最後の言葉であつた。

遂に首をたれ、靈をわたし給ふた。

その時、地震ひ、磐さけ、宮の幕は上から下まで裂けて二つになつた。

日は既に暮れて、十字架のみものすゞく、夕照ゆうさくに高く空につき立つてゐた。

その日は安息日の前の日だから、翌日までおくことをさけて、弟子のアリマタヤのヨセフ、ピラトの許しを乞ふて、屍體しかばねを納めやうとした。ピラトは百卒の長をよんで、死して時經たかどうかを調べさせて、ヨセフに與へた。

ヨセフは淨き亞麻の布で包み、ニコデモの持つて來た、没藥もつやく、沈香ちんかうの混ぜ物百斤ばかりも布の間に入れて卷いた。

そして、其近くの園にまだ人を葬つた事のない、新しい墓があつたので、そこに納め、墓の入口には石を轉ばして置いた。

□

安息日が終へて翌日、一週の首の朝早く起きて、マグダラのマリヤ・ヤコブの母マリヤ及びサロメ等、キリストに抹ぬらうと思つて、香料を持つて墓に行つた。

途々、「誰か私達に墓の入口の石を轉して呉れる人はないか」と、語りながら行くと、墓は既に石が取り去つてあつた。こんな大きい石を誰がのけたのをと不思議に思ひながら墓に入つた。

シモンペテロ達も、誰れか主を墓より何處へか取り去つた事を聞いて、走つて來て見た。

キリストの軀に卷いた布も去つてあり、首を包んだ手拭も、別の所にちやんと卷いてあるのを見出した。

弟子達が歸つても、マリヤ達は墓の外に立つて泣いてゐた、泣きながら屈かんで、見るとしもなく墓の中を見ると、キリストの屍體しかばねの置いてあつたあたりに、白い衣をまとつた二人の御使みつかひが、首の方に一人、足の方に一人座つてゐるのが見えた。

そして、其御使の言ふ事に、

「をんなよ、何ぞ泣くか」と、マリヤは不思議でたまらないので、

「誰か、わが主を取り去つてしまひました、何處へ持つて行つたのでせう」

そう言つて、ふと後ろを振り反つた時に、キリストの立ち居給ふたのを見た。
併しキリストとは知らないから、あまり氣にもとめなかつたが。
キリストが再び、

「をんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ねるか」と言ふので、これはテツキリ圍守だと思つて、

「貴方、貴方が若し取り去つたのなら、何處においたが知らせて下さい、私達が引取りますか
ら……」と、頼んだ。

すると今度は、

「マリヤよ」

と、呼びかけられたので、吃驚して、

「師よ」と、言つた。

この時キリストの言ふ事に、

「われに觸るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟達に往きて、「我はわが父、即ち汝
らの神に昇る」といへ」と。

マгдаダラのマリヤは、歸つて弟子たちに、主を見たこと、それから色々の言葉まで話した。

同じ日に、クレオバともう一人の弟子と二人で、エルサレムから三里程隔つたエマオといふ
村へ行かうとして、キリストの死なれた事や、その屍骸の見えなくなつた事やを、不思議がつ
て話しながら歩いてゐると、キリストが現れて、自ら近づいて一緒に歩いた。併し彼等は、目
が遮へきられてゐるから、キリストである事を認める事が出来なかつた。

その時、キリストは歩きながら彼等に向つて、

「なんぢら歩みつゝ互に語りあふ言は何ぞや」

彼等はだん／＼話して、酷く昂奮し悲しみに襲はれてゐたので、立ち止つた。そしてクレオ
バは答へて、

「貴方は、エルサレムに居ながら、此頃あつた事を知りませんか」と言ふと、キリストは、

「如何なる事ぞ」と向ふた。

二人は、ナザレのイエスが死罪に定められた事や、屍體の見得なくなつた事を、話した。

するとキリストは、

「あ、愚にして、預言者たちの語りたる凡てのことを信するに心鈍き者よ。キリストは必ず此等の苦難を受けて、其榮光に入るべきならずや」と、

眞心をこめて語るのであつた、尙も言葉を續けて、モーセや凡ての預言者について、聖書に記してある事を詳しく説き示した。

すでにエマオ近くなつたが、キリストはもつと先きまで旅をつゞける様子だったので、強いて止めて、

「もう夕方ですから、私達と一緒に留りませう」と、言つて、一緒に泊る事になつた。

夕べの食事についた時、キリストはパンを取つて、祝して擘き、彼等に分け與へた。

すると急に彼等の目開けて、キリストである事が分つて來た。

これはキリストであつたかと思つた時は、もうかけさへ見得なかつた。

弟子達は急いでエルサレムに立ち歸つた。エルサレムでも、十一人の弟子が他の人達と集つて、キリストが甦つてシモンに現れた事を話し合つてゐた。

そこへ驅けつけた二人のものも、さつきの事を話して、キリストの甦つた事がいよくハッキリした。

ある時は十二人の弟子に現れ、又ある時には五百人以上の兄弟に同時に現れた。

これも同じ日の夕の事、弟子達はユダヤ人を懼れて、戸を閉ぢてゐると、キリストが現れ、彼等の最中に立つて、

「平安なんぢらに在れ」と言つた。

併しハッキリ信じきれなかつた。するとキリストは、手と、脅とを見せた。全くそのまゝ、釘のあとや、傷口があるので、こうしてまざまざキリストに逢ふ事の出來た事を甚く喜び合つた。

その時、キリストは再び口を開いて、

「平安なんぢらに在れ、父の我を遣し給へるごとく、我も亦なんぢらを遣す」

こう言つて、息を苦しそうに言つた。

「聖靈をうけよ、汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその罪とゞめらる可し」と。

暫くたつて、トマスにその事を話したが、

「私は、その手の釘の痕を見たり、私の指を釘の痕にさし入れて見たり、手を脅に入れて見なければ、信じるわけには行かない」と、言つてどうしても疑つてゐた。

それから八日目ののち、又弟子達戸を閉ぢて家の中にあるた、今度はトマスもゐた。

その時キリストが再び彼らの中に現れて、

「平安なんぢらに在れ」と言つて、

トマスに向ひ、

「なんぢの指をこゝに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅に差し入れよ、信ぜぬものとならで、信するものとなれ」と、

すると、トマスは甚くひげ目を感じて、

「わが主よ、わが神よ」と言つた。

キリストは重ねて、

「なんぢ我を見しによりて信じたり、見ずして信するものは幸福なり」と言はれた。

十一人の弟子達は、ガリラヤに行つてキリストに命ぜられた山にのぼり、遂に謁まよえて拜した。

その時弟子達に、

「我は天にても地にても、一切の權を與へられたり、然れば汝ら往きて、もろくの國人を弟子とし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕ともに在るなり」と教へられた。

その後、シモンペテロ、トマスと他の弟子達と共に、テベリヤの海邊で漁獵すなだりをしてゐたが、その夜は何もとれなかつた。

「夜明け頃になつて、岸に見知らぬ人が現れて、『子どもよ、獲物ありしか』と、聞くものがあ

つた。弟子達は少しもとれないので、

「なし」と答へる外はなかつた。

その時又口を開いて、

「舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん」と、言ふので、

弟子達は網を下した、すると魚夥しく入つて、網を引き上げる事が能なかつた。

その時、見知らぬ人がペテロに近づいて、

「主なり」と言つた。

シモンペテロ「主なり」と聞いて、裸になつてゐたのを、すぐ上衣をまとつて海に飛び込んだ。

他の弟子達は、舟が陸から僅かに五十間ばかりだったので、魚の入つた網を小舟で曳いて来た、陸に上つて見れば、炭火もあり肴も備へてあつた。パンも用意してあつた。

そしてキリストは言つた。

「なんぢらの今とりたる肴を少し持ち來たれ」

シモンペテロ舟に行つて、網を陸に曳き上げて見ると、百五十三匹も大きい魚が入つてゐた。

それでゐて、小さい網が少しも裂けなかつた。

やがてキリストは、

「きたりて食せよ」と言つた。

弟子達はキリストと信じてゐるので、少しも不思議がらず、今頂いたパンと魚とをとつて喰べた。

□

幾度も弟子達に現れて、甦つたキリストは、弟子達をベタニヤに連れて行き、手を舉げて之を祝したまふた。

祝してゐる間に、彼等と離れ天に擧げられた。

弟子達之れを拜し、甚く歡びエルサレムに歸つた。そして常に宮に在つて、神様を讚美した。

聖
フ
ラ
ン
シ
ス

聖フランシスコの傳記
フランシスコの傳記は、その生涯の事蹟を記したものである。その生涯は、貧乏と苦行の道に歩いた。彼は、神の愛を心に抱き、人々の救済を志した。その生涯は、後世に多くの教訓を残した。彼の生涯は、神の愛と人々の救済の道を示した。彼の生涯は、神の愛と人々の救済の道を示した。彼の生涯は、神の愛と人々の救済の道を示した。

聖フランシスコ



伊太利の國でも、最も古い町の一つとして數へられるアツシジは、南伊太利の小都會である。今から七百餘年前西曆一千八百八十二年に、その最も富める家の一つ織物商ビエトロ、デ・ベルナルドの長子として生れた人が、世にも名高い聖著フランシスコであつた。

況んや聖フランシスコと呼ばれ、誕生の時から多くの、傳説が残されてゐる。

お母さんのピカ夫人が、いよ／＼産月になつても、中々容易に生れなかつた。そして随分苦しんだ。苦しんでゐるとどこからともなく一人の順禮が來て門を叩いた、そして曰ふ事に、「産をするのに、その美しいお室を去つて、厩舎の一隅へ藁を敷いてそこへ臥すまでは、決して嬰兒は産れはすまい」と、曰ふのであつた。直ぐ様その言葉に従つて母は厩舎に移つた。すると間もなくまる／＼と肥つた一人の男の子が産れた。丁度ベテレヘムにキリストが生れた様に、

フランシスは秣槽の中で産聲をあけた。

その時、父ベルナルドは旅に出て留守だったので、母は取りあへずヨハネと名づけた。間もなく父が戻つて来てからに、フランシスと改名した。

こうした傳説によつて生れたフランシスは生れながらに、普通の人とは違つたものを大切に
してゐた。

富める家の青年として成長したフランシスは、フランス語に巧みであつた。交際場裡の中心となり、何不足ない贅澤な暮しに日を過したり、美しい武裝を整へた騎士となつて、若い人達の羨望のまとなつたフランシスは、今迄とはちがつた世界に生活を求めてゐた。『本當の生活……正しき生活……美しき生活……貴とき生活……心に富める生活、そうしたイエス・キリストそのまゝの生活に憧る、如うになつた。』

そして、町から少し離れたところの絶壁に一つの洞穴があつた。フランシスはそこへ常に祈りに行つた。ある時は友達とも一緒であつたと傳へられてゐる。

アツシジの町から少し下つた所に、サン・ダミアノといふ古い堂があつた、全く荒れ果てた小さい堂であつた、たゞ裝飾としては高い壇の上にある大きな十字架きりであつた。この十字架の前に常々祈つた。ある時その十字架の前で祈りに跪いた。そして、

『偉大なる光榮ある神よ、わが主イエスキリストよ、私は光にてらされ、そして私の靈の間をとり去られん爲めに、あなたに乞ひもとめます。私に正しき信と、かたき希望と、まつたき愛とを與へて下さい、お、主よ、すべての事に於て、あなたの光に従ひ、そしてあなたの聖とい心になつて行ふ如うに、あなたを知ることがを私に與へて下さい』と、
こんな意味のことを祈つた。

それから後フランシスは、キリストの足跡そのまゝを踏む様になつてからも、常に祈つた。祈りが總てであつた。實に間斷なく祈つた。フランシスの生活全部が祈りであるとも曰ひ得る程であつた。

フランシスは獨り靜かに祈つた。ある時祈りの間に、アツシジの僧正が不意に驚かした事が

あつた。するとその僧が暫くの間啞になつて仕舞つたと傳へられてゐる。

朝は他の人より密かに先きに起きて、人に氣づかれぬ様に、森の中へ入つて祈つた。いつの時であつたか、兄弟等のうち隠れて窺ふものがあつた。するとフランシスに大きい光を見た。その光の中にキリストと、マリアと多くの天使との姿も見えて、何事かを囁やいてゐるのであつた。それでゐて歸つて來るところを見るとちつとも違つた事はなかつた。そうした孤獨の祈りもしたが、亦多くの兄弟とも共に祈つた。

フランシスが道を歩いてゐる時に祈りの時刻となれば、そこに立ち止つて祈つた。もし馬に乗つてゐればすぐ下りて祈つた。

一二三三年の十二月フランシスがローマからの歸り途中で、雨が降りそゞいで、全く酷い降りの中で肌までぬれ透るまでも、祈禱書をもつて定つたところまで祈り終へた。

或時、フランシスは閑だつたから、木を扶つて一つの椀を拵へた、丁度出來上つた時に祈りの時刻が來た。祈りをしながらも、椀が出來上つたそのうれしさに、彼の目は折々その完成し

た椀の方へ落ちた、とう／＼心を奪はれて、フランシスはもはや口に祈つてゐる言葉を殆ど注意してゐなかつた。その時、突然彼はその疎漏に氣附いた。氣がついたと思ふ間にフランシスは神様から心を奪ひ離したその椀をどつて火に段け入れて仕舞つた。

夜の祈りの時なぞ睡りに落ちない儀に、鐵の刺を箆めた帯を結び、その刺で睡りを防いだといふ。

亦ある時は、弟子のベルナードと共に寝ねて、ベルナードが寢入つて仕舞ふと、フランシスはソツと床から起きて、

『我が神よ、わが凡てよ』

と祈つて、そうして夜が明けるまで祈りつゞけた、且啜泣くこゑが斷えなかつた。とう／＼同じ言葉を繰り返して、

『我が神よ、わが凡てよ！』と、

それより外の言葉は更に出さなかつたといふ。本當に、敬虔と熱誠を以て祈る時に、外の何

事も言ふ事がいらないのであつた。

フランシスが、富み榮えた此世の生活にあきたらず、宗教的生活に入りきつた當時、ある日の事、フランシスはアツシジの下の、平原にあるボルチウンクラといふ古い小さい禮拜堂のあたりをさまよつてゐた。彼はまるで酷く悲しみに覆はれたやうに、歎きつゝ、啜泣きながら、堂のあたりをあらちちと歩いてゐた。その時一人の通りかゝつた人が、近よつて、情にみちたおもゝちして、

『何事がありましたか？』『なぜ貴方はお泣きになるのですか？』と聞いた。するとフランシスは答へた。

『私は、私の主イエス・キリストの悩みのために泣きます、そして私は、このために世界中をさまよひ、そして泣くことを恥ぢとしますまい』と。

この言葉に見知らぬ人も酷く感じて、その人も同じく涙を流し、二人で一緒に泣いたといふ。その時のフランシスの姿は、恰でひどいもので、顔は蒼白く、着物は裂けるだけ裂けて、襪

襪は下がり、集り來たる小供等からは、氣狂ひだ、發狂者だと罵られ見るかけもないものであつた。

フランシスは福音書を全くそのまゝ信じ、そのまゝの生活をしやうと心に確く決した。その時のフランシスのまなざしは酷く光つたであらう。又『愛』そのものであつたであらう。

□

或る日の事、フランシスの父ベルナルドが店に座つてゐると、町の方から大騒ぎが起つて來た。そしてだん／＼自分の店の前の方に近よつて來た、大勢の小供は哄めき、罵り、ワン／＼と群をなして騒いでゐる、石を投げるやら、泥を飛ばすやら、目もあてられぬ騒ぎであつた。やがて近づいて來た時それとハツキリわかつた。騒ぎの中心はフランシスであつた。

ベルナルドは、いまいましてと、恥しさとその頂點に達して、とても心を抑へてゐる事が出來なかつた。いきなり群集の中へ飛び込んで行つて、恰るで荒々しい獸の如うに、右に左に打つたり、蹴つたり、ものも日はずにフランシスを引つ捉へて、怒りながら、齒まで喰ひしほりながら、暗い穴倉のなかに放り込んで仕舞つた。

それもその筈であつた。父があれ程までに思つて、大きい未來を夢みてゐた長子が、あれ程までに輝やく希望を持ち續けてきた彼の愛子が……全く豫想さへしなかつた、嘲り笑ふ行列を長く従へて、フランシス自身はと見るに、青ざめて、瘦せおとろへて、髪をばふり亂し、窪んだ目のまわりには暗いかけの環さい出來て、その上ならず、投げつけられた石に血を流し、小供等から浴せりけられた泥と、塵埃にまみれて、恰で野良犬の如うに、夢遊病者そのもの如うに、立竦んでゐるフランシスを見た時の父の氣持は、随分であつたであらう。

父の誇り、老いの扶け、父の生涯の喜び、そして慰めでもあつた、多くの望みを、フランシスにつないでゐたのに、すべては一時にブツツリと切れ去つてあとかたさへなかつたので、父の窒息せんばかり愕いたのは、むりもない事であらう。

そして發作的に起つた發狂をでも癒そうと思つたのか、先づ禁錮したのだ。それでもいくらかの望みをもつて、パンと水ときり與へて、何とかして考へ直させやうと試みた。

けれども總てはむだであつた。父が間もなく旅に立つたので、母は涙を流して懇願した。けれども少しも受け入れそうにも見えなかつた。それどころではなかつた、フランシスは、自分

の考を、ひろまず、たゆまず、押し通す爲めに、酷い目に逢つた事を却つて悦びとさへしてゐた。

母はフランシスの新しい生活を棄てそうもない事をたしかめたので、良人の不在なのを幸に放してやつた。恰て捕へられた鳥が巢に飛び戻る如うに、フランシスは直ちにサン・ダミアノのかくれ家へ歸つた。

間もなく父が旅から歸つて來た、酷く腹を立て、遂に訴へ出て、家督相續の權を奪つて了つた。

いよく審判にあづかつた時に、フランシスは、全く赤裸かで、たゞ毛を織つた帯を腰に纏つて、残りの着物は皆片手に攫んで顯れた。多くの人は何事かと思つて固唾をのんで見入つた。フランシスは、激しい感情のひらめきに聲さへ震はせて、

『聽いて下さい、あなた方はみな私の曰ふ事を聞いて下さい。これまで私はビエトロ・ディ・ベルナルドを父と呼びました。今私は、父の金と、父から受け取つた着物とをみな父に返しました。そしてこれから後は私は、父ビエトロ・ディ・ベルナルドとは曰はずして、『天にまします我らの父』

と言ひます！』

と、言ひながらフランシスは、立派な緋色の絹ぐるみの衣物を父の足もとにおき、その上にも金も一緒にのせた。

居合せた人達は酷く感動して、多くの人は涙をとめ得なかつた。

その時僧正がフランシスに近よつて、彼の上衣をひろげ、赤裸かのフランシスをその白い髪に包み、そしてひしと胸に抱きしめた。此時から、フランシスは彼が永い間願つてゐた……「神の僕と」なり得たのである。

一二〇七年四月のある日。フランシスが二十五の年であつた。

□

フランシスは幼なき日の故郷を離れ、若い彼の富み榮えた町を去り、父母と別れ、親族や友達からも遠ざかつて、總ての思出多いフランシスの過ぎ去つたものから離れて、あてどもなくさまよひ出た。

フランシスは直ぐサンダミアノへも、それから廣野のボルチウクラの小さい禮拜堂へも向

はなかつた。フランシスの神様に歸つた氣持を、自然に吸ひよせられる如うに、モンテ、スバジオ山の方に向つて、アツシジの門を出た。そして山の方へ登る道をたどつた。聖書に書いてある事など思ひ出したりして、アツシジの塔や、屋根がどんなに振り返つても見えなくなるまで決して後ろを見かへらなかつた。そして、フランシスはたゞ獨り、モンテスバシオの高いところに来て、まだ葉のない榎の森や、荒れた石の原へたどりついてゐた。

こゝからフランシスは廣い四方をながめわたした。まるで風船の上から見下したやうに、白い路や、きら／＼光る川や、野原にはオリーブの木が規則正しく植ゑられて、玩具のやうな家々や寺が見えた。

フランシスは途中或る人から、一枚の衣物を貰つた。そして何處で拾つたか白墨の片で、自分の着物の脊に十字を描いた。

どういふつもりでなされたかは知らないが、フランシスが此世を去るまで、それがイエスキリストの苦難を偲ぶしるしとなつた。

地上の父に別れ、天父によつて養はれるといふ事を意味する事でもあらう。

フランシスはグツピオの方へ行く道を急いだ。アツシジからは此町へは直徑はわずか四五哩しか離れてゐない。そこに一人の友達が住んでゐた。だん／＼道が山の中に導かれてゐて、随分おそくなり、日は已に暮れて仕舞つた。フランシスはまだ淋しい森の山の脊を越してしまふことが出来なかつた。けれどもフランシスは、いつでもする様に、たのしそうにフランス語で神の讃へを歌ひながら歩きつゝけた。その時、大地の上に一パイに落ち散つた枯葉をがさ／＼と踏んで、山賊が現れた、嚇かすやうに、「そこにゐるのは誰だ！」

フランシスは少しも動ぜず答へた。

「私は偉大なる玉の使者である。そして汝等は何をしやうとするのだ。」

よく見ると實に見すばらしい憐れな風態をして、脊には白墨で十字が書いてある、此不思議な旅人を、山賊等は放してやる事にきめた。けれどもこの旅人に、命を拾つたといふ事を思ひ知らせやうとして、フランシスを引つ捕へて、

「これは狂人だな！ まで／＼そこに寝てゐる、王様の使者だなんて吐しやがつて、裸體にして谷底へ投げ込んでやれ。この土百姓め」そして衣を剥がれて、まだ春とは言へ雪の随分留つて

ゐる谷底へ放り込まれて仕舞つた。

「憐れな王の使者よ！ 其處がお前の棲家だぞ」

と、言ひのこして山賊は何處ともなく行つて了つた。

フランシスはその深い谷、雪の中から這ひ出るのは随分困難であつた。彼は決して何の咀ひの言葉も出さずに、とう／＼そこを出ぬけて、また前の様に、旅人の如うに、順禮の如うに、美しい氣持になつて、全身に塗れた泥や雪を落して、今自分が斯うして、文字通り本當に赤裸になつた事を、何かに感謝しながら、

「何物も持たざるに似たれども、凡てのものを我は持つ」

と、歌ひながら、赤裸で苦しみを受けた、救世主の道に、自ら裸となつて苦しみつゝ従ふ事を、フランシスは、その凡てを棄てた喜悅に浸りながら旅をつゞけた。

かなり歩いて彼はある小さい修道院にたどりついた。そこでフランシスは臺所で立ち働いてそのかはり暫くの間宿めて貰ふ事にした、そしてフランシスはその僧達の古い着物でも貰ふ

うと思つたが、それも出来ずわづかに少しばかりの食物を買ふばかりであつた。

その後多くの兄弟等と生活を初めた頃の事であつた。フランシスはどんな人でも決して棄てる事はしなかつた。わけでも、苦しみ多い人、よるべない人、貧しき人、虐けられし人、癩病の人、盗賊、凡ての者は彼にとつては親しみ深い友であつた。

「汝等互に相愛せよ」

と、いふ言葉通りの生活をした。

或日の事、ボルゴ・サン・セポルコロの上にある隠者小屋で、兄弟らが何事かしてゐると、一人の山賊が入つて来て、パンを乞うた。すると兄弟の一人は、

「お前は何んだ、恥を知らないのか、出て往けこの山賊め、もう再びこゝに来るな」

その時聖フランシスは旅から歸つて来た。兄弟達はあつた事を話した。するとフランシスは酷く悲しみの色をあらはして、

「お前たちは、如何してそんなに酷くしたのだ」

と、言ひながら、フランシスの兩の眼からは涙が滲み出てゐた。兄弟達は恐縮して仕舞つて永いこと沈黙におちた。

ついで、聖フランシスは靜かに兄弟に言つた。

早速善きパンと、葡萄酒を持つて森に行き、彼等にお言ひなさい。

「兄弟よ、こゝにお出で、私達は善き酒とよき葡萄酒とを、貴方方のために持つて来ました」と言つて彼等におすゝめなさい。彼等はすぐに来るでせう。そうしてお前達は地の上に布を敷いて食卓を設け、實に謙つて彼等に、食ひ終るまでお給仕をなさい。そしてそれがすんだら神様のお言葉を語つて、最後に彼等がお前達の乞ひを容れるまでお頼みなさい。

「貴方方が何人をも殺さず、誰れにも害を及ぼさない事を約束して下さい」とお言ひなさい。お前達はその約束を酷くせめて、總てを約束通り求め過ぎれば、必ず彼等は應じますまい、それで、お前達の充分の謙りと、真心をつくしたならばきつと約束するにきまつてゐる。

そのあくる日になつたら、よく約束をして呉れた償ひとして、お前達は彼等に、パンと酒と

罪と果實を携へて行き、再び彼等が食ひ了るまで給仕をしなさい。併して彼等が食ひ了つたら又お言ひなさい。

『なぜ貴方方は、終日さまよひて餓ゑをしのび、多くの苦しみに逢ひ、そして心と身に多くの悪行を積み、貴方達の靈に禍を重ねるのですか？。そんな事をよして神様にお仕ひなさい、その方がはるかに優つてゐます。神様はきつと、貴方達に、此世になくてならぬものはお與へ下さるにきまつてゐます。同時に貴方方は『第一の靈を救ふ事が出来ます…』』

こう言へば、神様は彼等に恵みを給ふて、お前達の謙りと忍耐の故に、彼等を悔ひ改めしめ給ふであらう』

その事を聞き終つた兄弟達は、聖フランシスの言葉通りにした。

盗人らとは見るに、感謝と、神の慈しみとに感謝して、眞心こめての兄弟等の謙りと、信頼とに依つて。彼等はとうとう兄弟等を助けて、修道院に薪を運び、又あるものは兄弟達の團體に加はり、あるものは罪を懺悔し、今迄の罪の贖ひをしたり、兄弟等の前で嚴かに誓つて、己れの手の勞働によつてのみ生活して、決して今迄の非行は爲ないと言明した。

それからすつと後の事、フランシスが旅をして、或る時ボツジボンシの町の、若い時分から知つてゐたらしい一人の商人、ルケジオと云ふ人に逢つた。ルケジオは此時までは、實に頑なそして貪り深い人であつた。けれども此時分から、急に考を改めた。

彼は貧しい者に施しをしたり、順禮には宿を貸す、寡婦や孤兒を助けたり、多くの慈善事業をした、フランシスは彼の悔ひ改めには大した感化もなかつたらしいが、彼と彼の妻に、生活上の色々の事や、罪を贖ふことについて色々話した事が、いよく彼の考を改めて、その後は前にも増して、閑さへあれば全部を慈善の仕事に送つた。病院に行つて病人を見舞つたり、ある時は一頭の驢馬に藥を負はせて、熱病が猖獗にあつたマレマといふ所に行つて、多くの熱病患者を助けたこともあつた。家にゐる時は、たゞ一枚きり施し残した小さい畑に出て、働いてはそこに出来た果物を賣つて、そして暮しを立てた。だか彼の一家がそれでは暮せない時があつた。その時は、彼はさまよひあるいて家々に乞ひ廻つた。始めの中は彼の妻は酷くその事だけには反對もしたが、ある奇蹟によつて改心して、その後は互に協力して出来るだけ施し廻つ

た。一二六〇年の四月二十八日に、僅か数時間の差で二人は共に死んだと傳へられてゐる。

聖フランシスがスバシオ山に、赤裸となつてさまよつてから後、再びアツシジに歸つた。それは前から氣になつてゐた。サン・ダミアノ堂を修復する爲であつた。

修復すると云つても随分たくさんのお金がいるので、その金はどうして得たらばい、のであらう？お金は得られなくても、若し色々なものが間に合へば、鋺を使ふ事は自分で出来ると思つた。けれど石や漆喰はどうしても唯では得られなかつた。

その時、フランシスはたゞで、石や石灰を得ることを考へ付いた。

ある日聖フランシスは、隠者の服を纏つて、アツシジの市場に現はれ、異様な巡歴詩人の如うに人々の前で歌つた。そしてその歌を歌ひ終つた時に、フランシスは聴衆の中を廻つて乞ふた。

『私に一つの石を下さる方は、天で一つの酬ひを受けます』

『私に二つの石を下さる方は、二つの酬ひを受けます』

『私に三つの石を下さる方は、三つの酬ひを受けます』

これを聞いて笑ふものもあつた。中には、

『あの様に、青春の快樂と、虚榮から移つて斯様に神の愛に酔ふまでに、彼は心を回したのか？』と云つて、涙を流した人もあつたと傳へられてゐる。

兎も角彼の真心に感じて、多くの石を集める事が出来た。それを彼は肩にのせては運んだ、フランシスは自分で石やの仕事もした。よく通りかゝつた人が、彼が仕事をしながらフランス語で神を讃へ歌つてゐるのを聞いた。若し立ち止まりでもして、ちつと見てゐるものでもあれば、フランシスは言つた。

『貴方は、そんな事をしてゐるよりも、私と一緒にサンダミアノのお寺を建て直ほすの手傳つて下さい』

この大きな勤勉によつてスツカリ感動して仕舞つたサン・ダミアノの牧師さんは、夕ゆふごとに出來るだけの美食を調べて供した。初めの中に何の考なしにそのもてなしを受けてゐるが、すぐに心に浮んだ。

「今私がしてゐる事は、私の願つてゐる如うな貧しく生きる事ではない。いや本當の貧しい人は家から家に、門をおとづれて何でも人様からの施しによつて生きねばならない」それが本當だと思ひ出した。それより他は自分には許されてゐない事だと考へて來た。

とうとうフランシスは、つぎの日晝の鐘がアツシジに鳴り渡り、どこの家でも食事につく時になると、鉢を手に持つて町から町へ巡りに出た。どこの家からも何ものかを恵まれた。一匙のスープ、肉の附いた骨、パン屑、サラダの残りの葉、あらゆるものが混つてゐた。まるで鉢に一杯であつた。フランシスは歸つて、階段に腰を下しながら鉢の中を注視した。とても手を出そうとも思はなかつた。色々な事が考へ出されて、まるで犬の餌の様にも思はれて、彼は全く嘔氣がこみ上げて來た。けれどもフランシスは、こみ上げて來る嘔氣を抑へて、まづ一口喰へた。

この時聖靈の妙へなる甘さにみたされた彼の心は、だん／＼そこに味を見出して、かつてこれよりも美味い喰物を味つた事がない様に思ひなされた。

その時であつた、我を忘れて走り行きサン・ダミアノの牧師に言つた。

『このさき私は自分でも食べるものを充分に得る事が出來ます』
と、そしてフランシスは此仕事の終結をつけた。
この時から聖フランシスは人々から物を乞ふ身となつた、全く貧しさに於て生きる身となつた。

フランシスは仕事をしまつたので、今度はこの祭壇を永久に照らす油を十分に贈るつもりであつた。そして、アツシジを巡つて油を乞ひ求めた。そのとき一人の昔の友達の家の前に来た、フランシスは、色々な氣持になつて、モンテ・スバジオ山の賊も怖れなかつた彼とは思へない如うに、ヘンにおぢけついて、その友達に逢ふことをためらつた。そして幾度か友達の家の前を歩み過ぎた彼の心弱さに力づけた。自分の弱かつた事を友達に懺悔して、油の喜捨を乞ふた。多くの油とそれから錢が集められた。

斯うしたフランシスの溢るゝばかりの熱誠と、真心はアツシジの町々の人を動かさすにはおかなかつた。